



Title	中国初期英語学習書における英語発音の漢字表記 : 流音の知覚と表記
Author(s)	田野村, 忠温
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2019, 59, p. 221-272
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72103
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中国初期英語学習書における英語発音の漢字表記

——流音の知覚と表記——

田野村 忠 温

1 はじめに

外国語の話しことばの獲得は語彙や文法に加えて音声の学習を必要とする。しかし、外国語の音声に関する知識や情報の乏しかった時代にあっては、音声の知覚はしばしば母語の音韻体系に強く依存せざるを得ず、したがって、音素の弁別も不完全な水準にとどまったはずである。

外国語の辞書や学習書において発音を示す手段として今では音声記号があるが、過去においては発音の表記には社会に広く通用していた文字が用いられた——現在でも音声記号の知識を持たない読者を対象とした通俗的な学習書においては同様である——。中国の場合、それは言うまでもなく漢字であった。

中国の初期英語学習書における英語の発音の漢字表記は当時の中国人による英語音声の知覚を反映したものと言える。中国語方言の如何にも依存する発音表記の様相は複雑で、また、学習書ごとに異なる。しかし、発音表記を注意して観察してみると、一見混沌とした表記の中にもさまざまなことが見えてくる。

発音表記の中で取り分け複雑な様相を呈し、注目に値するのは、英語の流音、すなわち、/l/ と /r/ に関わるそれである。本稿では、18世紀から20世紀初頭にかけての中国で執筆、刊行された英語学習書十数点における流音の表記法を分析し、その時間的な展開を跡付ける。以後、発音表記のことを中国語の用語を借りて短く「注音」とも表現する。

2 予備的考察

英語学習書における発音表記の分析に入る前にあらかじめ考えておくべきことが2つある。ここではまずそれらについて述べ、併せて、本稿で調査の対象とする英語学習書の範囲

を明らかにし、以後の論述に用いる用語を定める。

2.1 英語発音の漢字表記実現の過程

英語の発音の漢字表記、すなわち、注音は、英語から中国語への音声上の変換と、表記に用いる漢字の選定という2段階から成る処理として理解することができる。

また、古い時代の英語学習書の発音表記には著者の意図によらず生じたと見られる誤りや不統一が多い。学習書における発音表記の実現の過程は、注音の処理と誤りの混入という2種類の要素によって構成されていると言ってもよい。学習書の発音表記を適切に分析するには、誤りを訂正ないし除外して扱う必要がある。

中国の初期英語学習書における発音の漢字表記実現の過程に関する筆者の理解を図式化して示せば図1のようになる。誤りの混入は実際には注音の後のみならずその最中にも生じる。

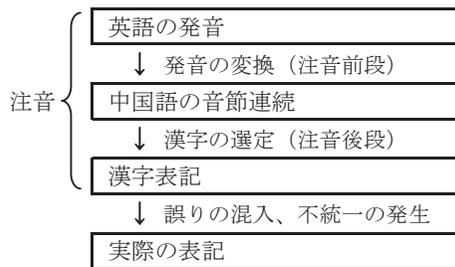


図1 英語発音の漢字表記実現の過程

この過程のそれぞれの段階について以下に述べる。

2.1.1 英語の発音に近似する中国語の音節連続の決定——注音の前段

発音表記の実現は、学習書の著者が英語の語句の発音を実際に聞き、もしくは、自身の英語の知識に頼って、その発音を中国語の音節の連続に変換する作業に始まる。具体的には、当該の語句の発音を表すのに適した分節音や声調の選択、母音の挿入や子音の省略による音節構造の単純化などがその主な内容である。学習書における発音表記実現の過程の根幹的な部分である。

この音声的変換は多くの要素に依存した複雑な処理である。単に英語の音素レベルの /l/ あるいは /r/ との変換結果との対応関係を求めるという方法では適切な分析は得られない。第1に、周知の通り、単一の音素でも音韻的文脈などによって発音が異なり得るという事実がある。異音の差として知られる英語内部における音声的変容である。したがって、必要に応じて英語の音素ではなく異音のレベルで対応を考える必要がある。

第2に、英語の発音を中国語の音節連続に置き換える際に、分節音の追加が行われることがある。例えば、『紅毛番話貿易須知』（後出）ではeelが「衣厘」、fullが「夫路」、allが「丫罇」と注音されている。表面的には語末の /l/ の発音が「厘」「路」「罇」で示された形になっているが、各字は /l/ を直接注音したものではない。各字は /l/ の後ろに挿入母音を加えてできる音節を表している。そして、各字の現代広東語での発音はlei4、lou6、laa3であり、¹ 挿入母音の選択は明らかに直前の音節に含まれる母音——各注音の第1字の発音はそれぞれ jil、ful、aal である——への同化の結果であると言える。² したがって、学習書で英語の音素 /l/ あるいは異音 [ɹ] の注音にどのような漢字を使っているかという問題設定では満足な理解が得られないことになる。英語の /l/ ないし [ɹ] がどのような中国語の発音に変換されているかというところから考察を始める必要がある。

音声的変換はまた、それが中国語のどの方言に基づいて行われるかによって当然その結果が異なってくる。流音に関して言えば、l と r の音韻的な区別を持つ方言もあれば、持たない方言もある。

そして、英語のどのような方言の発音を変換の対象とするかも結果を左右する可能性があることにも注意が必要である。英語の流音の発音は方言によって大きく異なり得るからである（Wells (1982b, 1982c)）。もっとも、学習書における注音から英語の発音の詳細を復元することは望めない。なぜならば、four という語が [fo] と読まれる漢字で注音されている場合に、語末の流音が省かれたのか、それとも、そもそも注音の対象とされた英語の発音に流音がなかったのかを判断することは困難だからである。

変換は常に不確定性を伴い、実際発音表記上かなりのゆれが認められる。これにはいくつかの原因があり得る。まず、変換はしばしば当該の英語の発音に近い中国語の音節連続の候補群の中から最良と思われるものを選ぶ操作であるから、その結果は著者の判断や偶然によって異なってくる余地がある。また、同一の音素、異音でも強勢が置かれた位置かどうか

1 広東語の発音は香港語言学会^{えつご}粵語拼音方案（略称^{えつピン}粵拼）によって表記する（香港語言学会粵語拼音字表編写小組（2002））。各文字の音価はおおむね普通話の漢語拼音^{ピンイン}の知識に基づいて判断することができる。ただし、j は国際音声記号（IPA）におけるように半母音を表す。1～6の数字は声調を示す。本稿の論述上声調のいかんは特に意味を持たないが、いちおう声調も記す。複数の声調を持つ字については適宜1つの声調を選んで示す。

2 母音挿入における同化には本文に挙げた型以外のものもある。例えば、『華英通語』道光本（後出）では bottle という語の発音は「吧啲刺」と表記されている。現代広東語におけるその発音は baal daal laal（ないし laa6）であり、ここでは第1音節 baa が第2、第3音節に含まれる挿入母音 aa を決定していると見られる。また、glass は「架刺時」—— gaa3 laal（ないし laa6）si4 —— と注音されている。これは第2音節の母音が第1音節の挿入母音を決定する逆行同化の例となっている。日本語にオランダ語の glass が「ガラス」という形で借用されたのとちょうど同じである。

といった違いによって、あるいは、同一の語でも単独の語として明瞭に発音するか句中で弱く発音するかといった違いによって、発音が変わり得るといった事情もある。さらに言えば、すでに社会で慣習化した外来語としての読み、あるいは、既存の学習書における注音が変換に干渉する場合もあった（後述）。

2.1.2 各音節を表す漢字の選定——注音の後段

注音の次の段階として、音声の変換によって得られた音節連続を視覚的に示すための漢字が選ばれる。

注音の過程の根幹は英語の発音から中国語の発音への変換にあり、漢字の選定——すなわち、中国語内部で行われるに過ぎない音節から文字への変換——の重要度は相対的に低い。音価さえ等しければ、どの漢字を選んでも実質的な差はないからである。現代であれば、変換の結果は漢字を用いず、拼音や注音符号によって表記することも可能である。発音の等しい漢字からの選択において考慮されるのは、筆者の認識の限りでは、注音によく使われる字とそうでない字の区別くらいしかない。もっとも、漢字選定に関わる事実にも、学習書間の継承関係を知る手がかりになるなどの研究上の利用価値はある。

漢字の選定について言えば、通常の漢字に偏や冠を加えて作り出された漢字の使用が広範に見られる。しかし、そうした漢字要素の付加は往々にして気紛れに行われており、そこに法則性は見出しがたいことが多い。特定の学習書の同一箇所と同じ英語の発音を示すのに、ある漢字とそれに口偏を加えた漢字とが混用されているといった事例も珍しくない。しかし、中には口偏の付加の有無によって発音の違いを示していると思われる場合もある。そうした具体的な事例2件——うち1件は /l/ と /r/ の発音の区別に関わる——については後に述べる。

注音の過程に音声上の変換と漢字の選択という2つの段階を区別する必要があることを念のために現代中国の通俗的な英語指南書に見られる注音に例を取って説明すれば次の通りである。現代の英語指南書を確認すると、人称代名詞の we、you はそれぞれ「維」「為」「未」、「由」「油」「友」「又」などの漢字を用いて注音されている。それらの違いは単なる漢字選択上の問題に過ぎない。拼音で表せばすべて wei、you であり、声調の差を捨象すればどの漢字でも発音上の差はない。これに対し、your は「要」「邀」(yao) と注音されていることもあれば「幺兒」(yao er) と注音されていることもある。where は「歪鵝」(wai e)、「外兒」(wai er)、「微兒」(wei er) などと注音されている。これらの表記はわずかであるにせよ相異なる音声的解釈、変換の結果である。

以後の考察では論述の簡潔を優先し、注音の2段階を分離して記述することはしないが、以上のような理解が一貫して前提としてある。

2.1.3 執筆から印刷に至る段階における誤りの混入

英語発音の漢字表記実現の過程における誤りの混入は、著者が意図的に行うものではなく、注音あるいは板刻、印刷の段階において偶然的に発生する問題に過ぎない。しかし、中国の初期英語学習書における、誤りや不統一を多く含む発音表記を正しく解釈するためには、そうした問題の存在を意識し、それに適切に対処することが必要である。

当該の箇所を見るだけで分かる単純な誤字や脱字も中にはあるが、むしろ注音の規則性を理解して初めて把握できる誤りのほうが多い。例えば、図2は『華英通語』咸豊5年本（後出）の一部である。



図2 英語学習書における注音の誤りの例

筆者の分析によれば、ここに見る語彙集の16項目のうち4項目もの注音——その、明暗を反転して示した部分——に問題がある。著者が意図したと推定される注音の方針に従っていないからである（後述）。割り切って言えば注音の誤りであり、もし誤りという判定を控えるとすれば不統一、例外である。

したがって、発音表記の分析に際しては、誤りを訂正して著者が本来意図したはずの表記を復元するか、それができないものは分析の対象から外すようにする必要がある。学習書に現れた発音表記を額面通り受け止めるといった方法では分析データの“ノイズ”が多すぎ、そこから規則性を読み取ることがむずかしい。もっとも、ある程度規則性が分からなければノイズを見分けることもできないので、ノイズの除去は分析と同時的、相互依存的に行うことになる。

2.2 「尢」に似た漢字の同定

中国の初期英語学習書において、流音の表記にはしばしば「尢」に似た字形の漢字が用いられている。あらかじめ明らかにしておく必要のある第2の問題は、これが何の字であるかということである。

2.2.1 「尢」 = 「兕」？

『華英通語』道光本(後出)において four という語の発音は図3に見るように「科尢」とも「科兕」とも記されている。³ ここでも、注目している箇所の明暗を反転して示す。

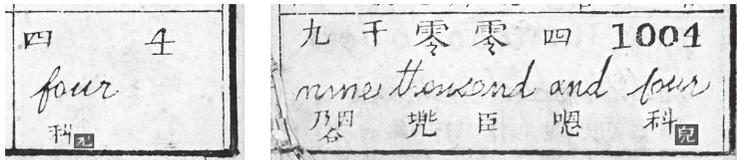


図3 『華英通語』道光本における four の注音

このような事例の観察に基づいて結論を急げば、「尢」に似た字は「兕」の字を崩したものだということになる。確かに「兕」の上半分を簡略化すれば「尢」のような形になりそうではある。

2.2.2 「尢」 = 「厘」

しかし、実のところその推論は正しくない。「尢」に似た字の使用状況に基づいて総合的に判断すれば、当の字は「兕」ではなく「厘」の異体字だと考えられる。

広東語の韻書『江湖尺牘分韻撮要合集』(1782(乾隆47)年原刊)は、図4に見るように、当の字に似た形の字を「厘」と同じ字として掲げている。⁴

当の字は『江湖尺牘分韻撮要合集』に基づいて編まれた Samuel Wells Williams *A Tonic Dictionary of the Chinese Language in the Canton Dialect* (衛三畏廉士甫編訳『英華分韻撮

³ 右側の項目の「1009」というアラビア数字の表記は明らかに「9004」の誤記である。なお、大阪大学附属図書館蔵の『華英通語』道光本には同書を使って英語を学んだ日本人による書き込みがある。しかし、本来資料にない書き込みがあると紛らわしいので、掲載の画像では書き込みを消去した。

⁴ 『江湖尺牘分韻撮要合集』は2冊の書物の内容を合わせたものである。各葉が上下に区分されており、本文開始部に記された書名によれば、上半分が手紙文例集の『江湖輯要』、下半分が広東語の韻書の『分韻撮要字彙』である。後者の作者名は「武漢温儀鳳岐山甫編輯」などと表示されている。『江湖尺牘分韻撮要合集』は少なくとも約1世紀の長きにわたってさまざまな出版者によって繰り返し再版された。本文に挙げた画像は大阪大学附属図書館蔵の1812(嘉慶17)年の版による。

の形に至る変化は図6のような過程として自然に想定することができる。そして、この第2以下の3つの字形は実際図5に掲げた書法辞典の3例にそれぞれ対応する。

尾 → 尾 → 尾 → 尤

図6 「麓」の下半分から「尤」への変化(推定)

なお、学習書によっては、「尤」を「厘」の略字ではなく本来の字として用いている。例えば、『華英通用雑話』（後出）はyouを「尤」、yourを「尤兒」と注音している。

また、「尤」に似た字が「兎」ではなく「厘」であるということは、『華英通語』道光本でfourという基礎語の発音の場合によって明確に異なる2つの中国語の音節連続に変換されていることになる。しかしそのことに関わる疑問は、同書の成立背景を考慮することによって説明が付く（後述）。

2.3 調査の対象とする英語学習書

本稿で調査の対象とする中国の初期英語学習書は表1に示す13点である。

学習書によってそれが注音の基礎とする中国語の方言が——そして、英語の方言も——異なり得るので、複数の学習書における発音表記を単純に比較できるわけではない。また、これらの学習書がすべて時系列を成す継承、展開の関係にあるわけでもない。したがって、本稿の課題は各学習書の発音表記の個別的な分析および可能な範囲における相互関係の解明ということになる。

なお、19世紀の早い時期に出版された中国人のための英語学習書には、表1に示したものの以外にも、1823（道光3）年にロバート・モリソン（Robert Morrison、中国名馬礼遜）がマカオで出版した英文法書 *A Grammar of the English Language, For the Use of the Anglo-Chinese College*（『英吉利文話之凡例』）と、1826（道光6）年にマラッカの英華書院（The Anglo-Chinese College）で出版された英語学習書 *The English and Chinese Student's Assistant, Or Colloquial Phrases, Letters &c. in English and Chinese: The Chinese by Shaou Tih, A Native Chinese Student, in the Anglo-Chinese College, Malacca*がある。しかし、いずれの学習書も英語表現の発音を示していないので、本稿の考察対象の範囲には入らない。

2.4 用語の定義など

以後の論述の便宜のために、2、3の用語を定める。

まず、頭子音——中国語の用語では声母——としての英語の /l/、/r/ の現れを「頭音の

表1 調査対象とする中国の初期英語学習書

成書・刊行年	著者	書名	本稿での呼称
18世紀中葉	不明	『啖咕喇国訳語』	
1830年代以後	不明	『紅毛番話』類の語彙集	
1843(道光23)年	ロバート・トーム	『華英通用雑話』	
1849(道光29)年	鄭仁山	『華英通語』	『華英通語』道光本
1855(咸豊5)年	子卿	『華英通語』	『華英通語』咸豊5年本
1860(咸豊10)年	子芳	『華英通語』	『華英通語』咸豊10年本
1860(咸豊10)年	馮祖憲	『英語註解』	
1862(同治1)年	唐廷枢	『英語集全』	
1875(光緒1)年	鄭其照	『字典集成』第2版	
1879(光緒5)年	楊勳	『英字指南』	
1895(光緒21)年	黄少瓊	『字典彙選集成』	
1904(光緒30)年	莫文暢	『唐字調音英語』	
1904(光緒30)年	卓岐山	『華英類語』第2版	

/l/「頭音の/r/」と呼び、韻——韻母——の位置におけるそれを「末音の/l/」「末音の/r/」と呼ぶ。頭音、末音は音節の冒頭、末尾に限らず、threeに含まれる/r/のように別の子音に後続する流音や、saltに含まれる/l/のように別の子音に先行する流音もそれぞれ含む。

また、/l/で始まる音節を表す——声母がlである——漢字を「L音字」と呼ぶ。英語学習書で流音ないし流音で始まる音連続の表記によく用いられているL音字は「尤(厘)」を始めとして数多く、ほかにも数例を挙げれば「拉」「刺」「来」「羅」「炉」「蘭」「林」「令」「連」「勒」などがある。

3 各英語学習書における流音の漢字表記

これより中国の初期英語学習書における流音の漢字表記の状況をおおむね成書、刊行時間の順に考察する。語彙集と会話文例集から成る学習書については、語彙集を調査の対象の中心とする。

論述に際し、漢字の字体は原則として現代日本のそれによる。また、英語表現の表記は通常の綴りにより、当該の議論の文脈で発音上着目している部分を bottLE、fouR のように大文字にして示す。これは音声記号を使おうとした場合に生じる問題や煩瑣を避けるための便法である。また、その関係で、学習書で英語表現の表記に大文字が使われている場合は小文字に変えて引用する。資料の葉数と表裏は第1葉表を「1a」、第23葉裏を「23b」のように

して示す。

3.1 『啖咕喇国訳語』

3.1.1 資料の概要

『啖咕喇国訳語』は中国最古の英語語彙集である。明清代に編纂された官撰対訳語彙集『華夷訳語』の1つであり、北京の故宫博物院に写本が残されている。『啖咕喇国訳語』の成書時期については18世紀中葉とする見方が支配的である（Fuchs（1931）、楊（1985）、黄（2010））。

筆者はその内容をまだ中国国家図書館のWebサイト（<http://www.nlc.cn/>）に掲載された同書の紹介動画によってしか確認できていない。楊（1985）によれば『啖咕喇国訳語』には730件の語句が収められているが、動画で確かめられるのはその約半数である。内容に種々の誤りがきわめて多く、ポルトガル語の表現の混在も目立つ。また、動画では文字の判読がむずかしいところも多い。ここでの分析はそうした事情の制約を受ける。

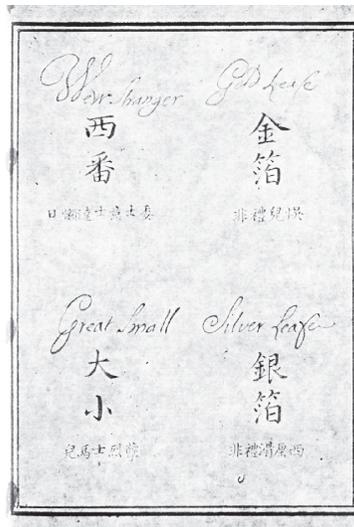


図7 『啖咕喇国訳語』（「通用門」半葉）⁵

『啖咕喇国訳語』の各項目は、図7に見るように、英語表現、中国語表現、英語表現の発音の漢字表記という3つの要素から成る。注音の漢字には小さな文字が使われている。図中の2項目を文字化して示せば次の通りである。

⁵ 中国国家図書館蔵の『啖咕喇国訳語』は故宫博物院蔵の写本の複製と見られ、明暗が反転し、色は全体に青である。図7の画像では明暗を逆転させて元に戻した。図中の英字の部分が一部判読しにくいのが、それぞれ gold leafe、silver leafe、west stranger、great small であろう（leafe は leaf の古形の1つ）。

gold leaf 金箔 悞兒礼非、great small 大小 葭烈士馬兒⁶

要素の配置上は英華対訳のように見えるが、実際には中国語の語彙リストに英語の訳語を与えた華英対訳であるので——チベット語の語彙集である『西番訳語』と内容が共通することを Fuchs (1931) が指摘している——、以下の挙例においては要素順を変えて「金箔 gold leaf 悞兒礼非」のような形とする。注音の部分も通常の大きさの文字とする。

3.1.2 頭音の /l/、/r/

『啖咭喇国訳語』において、頭音の /l/ と /r/ はいずれも、後続する母音ないし母音と子音の連鎖と合わせて、L 音字で注音されている。頭音の /l/ の例としては次のようなものがある。『啖咭喇国訳語』には葉数の表示がなく、かつ、上述の事情により葉数を正確に数えることもできないので、資料内における出現位置は語彙の部門名によって示す。

下 LOW⁷ 落 (方隅門)、人夫 coolIE⁸ 姑厘 (人事門)、字 LEtters 烈達⁹ (通用門)、職事 to be diLIgent 多味爹喇引¹⁰ (人事門)、飛 to fLY 法来 (鳥獸門)、借 LENd 憐 (人事門)、清淨 very cLEAN¹¹ 密里咭噠 (人事門)、槍奪 pLUNder 不弄爹 (人事門)

頭音の /r/ の例としては次のようなものがある。

鼠 RAt 喇的 (鳥獸門)、写 WRItE 列的 (通用門)、樂 veRY meRRY¹² 勿里瑪里 (人事

6 この第1字は「孽」のように見えるが、発音上「葭」の誤記と推定して訂正した。

7 原文では lower down であるが、注音に合うように訂正した。

8 原文では lady であるが、誤りと見て訂正した。また、原文では冠詞の付いた a lady という形で記されているが、冠詞は注音されていないので、引用では省いた。注音されていない冠詞および不定詞の to については以後の例でも原則として同様に扱う。

9 この注音では「烈」の入声も letter の /t/ を示していると考えられる。しかし、/t/ の表示の主役は明らかに「達」であるので、「烈」は LEtter の大文字の部分だけを表すものとして扱う。以後の例においても同様とする。

10 この注音に含まれる「味」は英語の be に対応している。『啖咭喇国訳語』を含む中国の初期英語学習書にはこのように m の声母を有する漢字によって /b/ ないし /v/ を表した例が多い。矢放 (2011) はこの種の現象に関する詳細な考察である。

11 原文はおそらくポルトガル語 limpísimo。「清淨」の語義と注音との対応の観点から、本来 very clean とあるべきものと推定した。

12 原文の very mery を訂正した。

門)、三 thREE 的里 (数目門)、樹 tREE 地里 (花木門)、草 gRAss 葭喇士 (花木門)、
果品 fRUIt 付魯多 (花木門)、紫檀 RED wood 列伍 (香藥門)

3.1.3 末音の /l/、/r/

末音の /l/ の発音は大多数の場合において「兒」で示されている。

図書 seaL 西兒 (文史門)、中間 middLE 米兒 (方隅門)、香 smeLL wood¹³ 心滅兒伍 (香
藥門)、珊瑚 coraL 過喇兒 (珍宝門)、珍珠 pearL 別兒¹⁴ (珍宝門)、旧 oLd 阿兒 (人事門)、
生番 wiLd man 委兒漫 (通用門)、狼 woLf 禍耳 (鳥獸門)

ただし、ときにL音字「里」ないし「列」が使われていることもある。

水銀 quick siLver 決西里滑 (珍宝門)、説 to teLL 多爹列 (通用門)、燃燈¹⁵ light
a candLE 来得堅列 (經部門)

これらは /l/ に挿入母音を添えた音節を表そうとしたものである可能性がある——現代広
東語における「里」の発音は lei5、「列」の発音は lit6 である——。しかし、「兒」を用いた
場合との関係が分からず、確かなことは言えない。

また、次の例では末音の /l/ が注音されていない。着目している流音が注音されていない
ことを以後「 ϕ 」で示す。

駝 a cameL 葭滅 ϕ (鳥獸門)

この例は単なる脱字の可能性はあるが、これについても確認できる類例が乏しく、実際の
ところは分からない。

末音の /r/ は示されていないことが多いが、ときに「兒」またはそれと同音ないし類音と
見られる「耳」によって注音されている。

前 befoRE 墨火兒 (方隅門)、琥珀 ambeR 安伯兒 (珍宝門)、勢大 great aRmy 格列哈

¹³ 原文では smell であるが、wood を補った。先に挙げた「紫檀 red wood 列伍」の例 (3.1.2) と同じく、
注音の「伍」は wood の発音を示すものと考えられる。

¹⁴ 原文の pearl を訂正した。また、注音の第1字が不鮮明で判読がむずかしいが、「別」の字と判断した。

¹⁵ 原文の「然」を「燃」に訂正した。

兒米（人事門）、北 noRth 那耳的（方隅門）

以上のことから、『啖咕喇国訳語』における英語の流音の注音では、/l/ と /r/ はほとんど区別されていないとすることができる。

3.1.4 注音の方言的基礎と注音者

『啖咕喇国訳語』の注音が中国語のいかなる方言に基づいているかという問題について、従来の研究——韓（2008）、聶・王（2011）、中国国家図書館の紹介動画——の見解は、結論の細部においては異なるが、広東語の影響を最重要視する点で一致している。

そうした見方は確かに正しいと考えられる。従来の研究はいずれも証拠として l と r、[ç] と [h]、[s] と [ʃ] などの音対の同一視を挙げているが、『啖咕喇国訳語』の注音をさらに観察すれば広東語的な要素がほかにも見出される。

その1つは、入声を利用していると考えられる次のような注音である。入声字の発音を後ろに添えて示す。[] は音声記号ではなく単なる注記の表示である。

葉 LEAF 立 [lap6]（花木門）、肥 FAT 法 [faat3]（通用門）、遲 too LATE¹⁶ 都列 [lit6]（人事門）、紫檀 RED wood 列伍 [lit6]（香葉門）、兎 raBBIT 喇密 [mat6]（鳥獸門）、卷 BOOK 目 [muk6]（經部門）

これらの例は、注音者がそのような入声を有する中国語方言の話者であったことを示唆している。

また、次の例では「攬」の字の広東語における laam5 という読みを利用して注音されると見られる。

許 pROMise 巴攬士（通用門）

さらに、次の例では広東語で laa3 という発音を持つ漢字が使われている。

藏經 pRAYers 罷罽也兒（經部門）

注音者は「罽」という漢字を知り、かつ、それを当の英語の注音に適した発音で読む人物

¹⁶ 原文では very slowly であるが、注音との関係において too late とあるべきものと推定した。

であったと考えられる。

中国国家図書館の紹介動画は『啖咕喇国訳語』の編纂者を“広東人もしくは英語学習に際して広東の英語使用環境の影響を受けた人の可能性が高い”と解説しているが、以上のような漢字選択の事実を考えると、英語学習時に広東語に触れた他地方の出身者ではなく広東人と見るのが自然であろう。

しかしながら、『啖咕喇国訳語』における注音の方言的基礎をそれほど単純に理解することもできない。末音の /l/ と /r/ の注音に「児」や「耳」の字が用いられているからである。両字の広東語での発音は jī4、jī5——j は半母音を表す（注1）——であり、/l/ や /r/ の音からはかけ離れている。この事実は、同書の注音が広東語に基づくとする見方と相容れない。

広東人が末音の /l/ と /r/ の注音に限って官話、北方方言を利用したということかとも考えられるが、そのような推定の証拠として今示し得る事実はない。もっとも、後の19世紀の英語学習書には現にそれに近い注音の方針を明記したものがあり（後述）、純然たる想像というわけでもない。¹⁷

3.2 『紅毛番話』類の語彙集

3.2.1 資料の概要

『紅毛番話』は、1830年代以後の広東で出版されていた一類を成す英語の対訳語彙集の総称である（Williams (1837)）。西洋との貿易に携わる中国人によって利用されたもので、内田・沈編（2009）には語彙集8点の影印が収められている。それらの資料の内容を比較してみると、相互の類似性が高いことが分かる。

ここではベルリン州立図書館の Web サイト（<https://staatsbibliothek-berlin.de/>）で画像公開されている富桂堂蔵版『紅毛番話貿易須知』——内題は『新刻紅毛番話』——を資料として用いる。刊行年の記載はないが、内田・沈編（2009）に収められた書名、蔵版者名ともに等しい語彙集に比べて字体が整っていることから、刊行は比較的遅く、19世紀中葉以後と推定される。収録語は比較的少なく、約400件にとどまる。

『紅毛番話』類の語彙集の各項目は、図8に見るように、中国語表現とそれに対応する英語表現の発音の漢字表記という2要素によって構成されている。英語の綴り字は示されていない。数詞以外の項目の例を示せば次の通りである。

父 花打、母 孖打、朋友 父噠、筆 辺、墨 英忌、塩 沙路、糖 酥忌利、油 挨利

¹⁷ 聶・王（2011）は『啖咕喇国訳語』の注音にはむしろ閩方言ないし客家方言に近い要素も見られると述べている。しかし、具体的な議論はなく、それがどのような事実を指しているかは筆者には分からない。

二十一	十七	十三	九	五	一	新刻紅毛番話 生意數目門 富桂堂藏板
敦地温	心顛	哇顛	堦	輝	温	
廿二	十八	十四	十	六	二	
敦地都	噓顛	科顛	顛	昔士	都	
廿三	十九	十五	十一	七	三	富桂堂藏板
聖地地	堦顛	輝顛	噓	心	地理	
廿四	二十	十六	十二	八	四	
敦地科	敦地	昔士顛	推側	噓	科	

図8 『紅毛番話貿易須知』（第1葉表）

各例で注音された英語表現は、father、mother、friend、pen、ink、salt、sugar、oilである。『紅毛番話』類の語彙集はピジン英語の要素を含む。『紅毛番話貿易須知』には次のような例が見られる。

無（ない）哪哈、唔做得（できない）哪堅都、一樣（同じ）丫罈心
 曉得（知っている、分かる）沙鼻、請（どうぞ）毡毡

第1行の「哪哈」はno have、「哪堅都」はno can do、「丫罈心」はall sameの注音であり、いずれも英語として破格である。「沙鼻」はポルトガル語（ないスペイン語）に由来するsavvyであり、「毡毡」——広東語の発音はzin1 zin1——は中国語の「請」がピジン化したものである。

以下の挙例に際しては便宜上、推定される英語の綴り字を補充し、「父 father 花打」のような形とする。英語の語形がはっきりしない項目やポルトガル語と見られる項目は観察の対象から外す。

3.2.2 頭音の/l/、/r/

頭音の/l/、/r/は『紅毛番話貿易須知』においても区別されず、後続する母音ないし母音

と子音の連鎖との組合せがL音字によって注音されている。/l/と/r/に分けて例を示せば次の通りである。

中意 LIke 吼忌 (2a)、低 LOW 囉 (4b)、辣椒 chiLI 至烈 (5b)、随便 pLEase 鼻
离士 (2a)、一個花錢 one doLLAr 温打鏢 (1b)、水手 saiLOrman 些利文 (2b)、遠
LONG way 冷威 (3b)、干淨 cLEAN 忌噠 (3a)、碟 pLATE 別烈 (6a)

蘿蔔 RADish 辣离士 (5b)、兄 bROther 不嘍打 (2b)、実守好 veRY good 威里活 (4a)、
明日 tomoRROW 度仔鏢¹⁸ (5a)、三 thREE 地理 (1a)、怒 angRY 鬚忌利 (5a)、実
tRUE 度佬 (4a)、雨 RAIN 噠 (3b)、緑 gREEN 忌噠 (3b)、紅 RED 劣 (3b)

「碟 pLATE 別烈」の「烈」、「紅 RED 劣」の「劣」の広東語における発音はそれぞれ lit6、lyut3であり、いずれも入声を利用した注音と見られる。

なお、次の例では頭音の/r/が注音されておらず、異例である。

買弁 compRAdor 公不 ϕ 多 (2b)

内田・沈編 (2009) に収められた資料数点においても「買弁」の訳語は「公不 ϕ 多」ないし「金不 ϕ 多」とされ、当該の/r/と後続の母音の発音を表記した例は見られない。貿易業界の重要語でやや長いことから、語中の部分を省いて発音する外来語として定着していた可能性がある。

3.2.3 末音の/l/、/r/

末音の/l/は、それに挿入母音を添えた音節がL音字で表されていることが多い。

白蟻 eeL 衣尤 (6b)、油 oiL 挨利 (6a)、満 fuLL 夫路 (3a)、旧 oLd 区路 (4b)、冷
coLd 鳩路 (3b)、塩 saLt 沙路 (5b)、小 smaLL 士仔鏢 (4b)、一総 aLL 丫鏢¹⁹ (5a)

「尤 (厘)」「利」「路」「鏢」の発音はそれぞれ lei6、lei6、lou6、laa3であり、挿入母音の選択には先行する母音への同化の要素が関わっているものと見られる。

¹⁸ 原文の「鏢」(fu1)を「鏢」(laa3)に訂正した。

¹⁹ 原文の「鏢」を「鏢」に訂正した。

中には次のように末音の /l/ が注音されていない場合もある。

叔 unclE 𠵼忌[˙]ϕ (2b)

『紅毛番話貿易須知』は収録語数が少ないこともあって類例が乏しいが、内田・沈編(2009)に『紅毛番話 (内田発見本)』として収められた資料を見ると whoLE、troubLE、doubLE、singLE などの語において末音の /l/ の注音が省かれている。末音の /l/ の省略は一般的な現象であったと考えられる。

末音の /r/ は一般に注音されていない。

四 fouR 科[˙]ϕ (1a)、父 fatheR 花打[˙]ϕ (2b)、濶 laRge 鱗[˙]ϕ 治 (4b)

ただし、sugar という語に関しては次のように /r/ が一貫して注音されている。「酥忌利」の広東語での発音は sou1 gei6 lei6 である。

糖 sugaR 酥忌利[˙] (5a)、氷糖 sugaR candy 酥忌利堅地[˙] (5a)、沙糖 sugaR powder 酥忌利歩[˙] (5a)

しかし、この語に限って末音の /r/ が注音された理由は不詳である。そのような形で外来語として定着していたのかも知れないが、それを示す証拠は得られていない。

また、次の項目も筆者の見るところでは変則的である。ここでは議論の必要上英語の綴り字の補充を省いて示す。

女 家児 (3a)

これと同じ記述がほかの複数の『紅毛番話』にもあり、周 (1998, 2004) や Bolton (2003) は資料を信用して「家児」を girl の注音と見ている。しかし、その解釈には無理がある。「児」の字は筆者の確認の限りでは『紅毛番話』で流音の注音に使われていないし、また、「家児」を広東語の発音で理解すれば gaal ji4 のようになって /r/ も /l/ も消え、何のために「児」が加えられたのか分からなくなってしまう。筆者の推定によれば、これは本来「女兒 家」とあるべきものの誤写、誤刻であり、我々は資料を訂正して受け止める必要がある。「女兒」を表す girl の発音が「家」—— gaal ——として示されているのであり、ここでは末音の /r/ も /l/ も注音されていない。『紅毛番話 (内田発見本)』には「女子 呀」という項目があり、「呀」

の発音は ngaal である。

3.2.4 注音の方言的基礎

『紅毛番話貿易須知』には入声を利用した注音が非常に多く見られる。先に触れたもの(3.2.2)以外にも次のような例がある。

船 SHIP 涉 [sip3] (5a)、茶盃 tea CUP 哋蛤 [gap3] (6a)、捶 sLAP 是嶺 [lip6] (3a)、食 EAT 噎 [jit3] (3a)、床 BED 必 [bit1] (6a)、乜 WHAT 屈 [wat1] (4a)、病 SICK 昔 [sik1] (3a)、煙 sMOKE 士卜 [buk1] (6a)、医生 DOCTor 得打 [dak1] (2b)

また、mで終わる韻母を利用した注音の例もある。

来 COME 今 (5a)、名 NAME 拈 (3a)、去帰 go HOME 哥堪 (4b)

「今」「拈」「堪」の広東語での発音は gam1、nim1、ham1 である。

『啖咭喇国訳語』の注音は基本的に広東語に基づいていると見られる一方で、末音の /l/ と /r/ の注音に「児」や「耳」を使うという北方方言的な要素が混在していたが、『紅毛番話貿易須知』にはそのような二面性は認められない。筆者の確認の限りにおいて、『紅毛番話貿易須知』を含む『紅毛番話』類の語彙集における注音の基礎は広東語であると単純に言うてよい。

3.3 ロバート・トーム『華英通用雑話』上巻

3.3.1 資料の概要

『華英通用雑話』上巻はアヘン戦争直後の1843(道光23)年に出版された、語彙集と会話文例集を内容とする英語学習書である。著者であるグラスゴー出身の英国商人ロバート・トーム(Robert Thom、羅伯聃)は、当時広東を中心に広く通用していたピジン英語に取って代わるべき正統な英語を中国人に教えることを目的として本書を編んだ。英語の書名は *Chinese and English Vocabulary, Part First* である。トームの夭折により、下巻、Part Secondが刊行されることはなかった。²⁰

調査は大阪府立大学総合図書館中百舌鳥蔵本による。ただし、同本は重要な記述(後述)を含む最終葉に欠損があり、その部分についてはオーストラリア国立図書館のWebサイト

²⁰『華英通用雑話』および後出の『華英通語』各版の詳細については拙論(2018)を参照。

英 通 用 雜 話 日 常 口 頭 語 十 二	城 裡 咽 的 夕 地 inside city	肥 地 吻 蘭 的 rich land	山 崗 吻 蘭 的 a meath.	地 理 圖 吻 蘭 的 the HEAVENS	天 吻 蘭 的 地 吻 蘭 的 兒 特
	域 外 吻 蘭 的 夕 地 outside city	荒 地 吻 蘭 的 barren land	高 嶺 吻 蘭 的 mountains.	海 面 圖 吻 蘭 的 a chart.	地 吻 蘭 的 兒 特
	鄉 間 吻 蘭 的 理 in the country	水 地 吻 蘭 的 watery land.	山 地 吻 蘭 的 理 hilly country.	四 海 吻 蘭 的 the seas.	天 吻 蘭 的 兒 特 吻 蘭 的 兒 特
	村 庄 吻 蘭 的 a village.	野 地 吻 蘭 的 desert lands	平 地 吻 蘭 的 理 flat country.	大 洋 吻 蘭 的 the ocean.	地 吻 蘭 的 兒 特

図9 『華英通用雜話』（第22葉表）

(<https://www.nla.gov.au/>) で公開されている画像によって確認した。

3.3.2 「切」と「合」

『華英通用雜話』における英語発音の注音ではしばしば、

nine 𠄎𠄎 (凡例1b)、good 𠄎𠄎 (凡例7a)

のように「切」あるいは「合」の表示が左脇に小字で添えられている。「合」は「合念」（念は“読む”）と書かれていることもある。この「切」と「合（念）」は『華英通用雜話』の注音を理解するうえできわめて重要な要素であるので、その内容を正確に把握するとともに、問題点についても確かめておく必要がある。

まず、「切」は反切式の表記で、第1字の声母と第2字の韻母を組み合わせ得られる音節を示す。例えば、「切」の添えられた「的因」はtin、「弗兒」はfor、「非由」はfewの注音に使われる。

そして、単独の漢字でも「切」の方法でも表せない音節の表記に使われるのが“複数の漢字を続けて一気に読む”ことを示す「合」で、これは——巻頭の凡例における解説は誤っている——筆者の理解に基づいて述べると——ある字の声母を直前（または直後）の字の表す音節の後ろ（または前）に加えて得られる音節を表す。例えば、「合」の添えられた「示必」は sheeP、「滑的」は whaT、「葉士」は yeS、「密及」は maKE、「必連」は Plain を表す。ここで加点を施して示した字は声母だけを発音する。字数の多い「合」もあり、「爹必力」は taBLE、「啤吟及」は DrinK、「士的的的」は STreeT を表す。そうしたものには「三字合」「四字合念」のような表示が添えられている。

「切」と「合」の実際の表示には混乱、不統一が見られる。例えば、four は「仏児」の「切」と注音されていることがあれば (2a)、「仏児」の「合」と注音されていることもある (1a)。²¹ また、horse は「哈児士」と注音され、「哈児」の脇に「切」、「児士」の脇に「合」が添えられているが (12b)、coarse——horse と頭子音のみが異なる——は「哥児士」の「三字合」とされている (7a)。しかし、筆者の理解によれば、『華英通用雑話』で行われている限りにおいてそもそも「切」による音節の合成は「合」による音節の合成の一種であり、「切」の例はすべて「合」の例と見ることもできる。したがって、表示の混乱が生じるのも無理のないことである。

「合」による注音法は、厳密に言えば、表記の曖昧性という原理的な欠陥をはらんでいる。例えば C_1V_1 と C_2V_2 という2つの音節の連続を「合」によって1音節化するとき、その結果は $C_1V_1C_2$ になる可能性と $C_1C_2V_2$ になる可能性とがある。実際には声母だけを使う漢字の種類が限られているので——凡例で例示されている「必」(p、b)、「的」(t、d)、「及」(k、g)、「士」(s、z)、「力」(l) など——、「合」によって合成される音節はたいていの場合には分かる。しかし、silk を表す「士力及」の「三字合」のような注音の場合に、それを見てどの漢字の韻母を発音すればよいかを知ることは不可能である。

なお、「切」と「合」は注音を正しく理解するうえで必須の表示であるが、多くの場合英語の発音と各漢字の発音の対比に基づいて復元することができるので、以下では特に表示の必要のある場合に限って示す。

3.3.3 頭音の /l/、/r/

『華英通用雑話』でも一見の限りでは、頭音の /l/ と /r/ の注音の方法はこれまでに見てきた英語学習書と共通である。すなわち、/l/ と /r/ は区別されず、後続の母音ないし母音と

²¹ 「仏」に口偏が加えられている場合もあるが、口偏の有無はこの場合に関する限りおそらく注音上の意味を持たない。

子音の連鎖との組合せがL音字で表されているように見える。/l/と/r/に分けて例を示す。²²

檸檬 LEmons 厘門士 (11b)、湖 LAke 喇及 (22b)、軽 LIght 来的 (3a)、大洋錢 doLLAr 托拉 (3b)、酒盃 wine gLAsses 歪因 及拉士士 (9b)、蒜頭 garLIC 加兒勒 (11a)、碟 pLAtes 必厘的士 (9a)、素紬 pLAIN silk 必連 士力及 (7b)、法律 LAWs 哞 羅士 (37b)、夜燈 LAMps 纜必士 (9b)、黒 bLack 必勒及 (8a)

路 ROAd 囉的 (22b)、右 RIght 唛的 (27a)、石礁 Rocks 喀及士 (23a)、大褂 dREss coats 地厘士 葛的士 (10a)、原色布 gREY long cloths 刻里 唛 各羅嘑士 (5a)、菓子 fRUIts 弗嚕的士 (11b)、大街 public stREEt 不必力及 士的列的 (23a)、朋友 fRIENds 弗噠士 (25a)、鉄 iRON 喉唵 (6a)、春 spRING 士不吟 (20b)

しかし、多数の例を注意して観察すると、L音字への口偏の付加が/l/では少なく、/r/では多いという印象がある。上に挙げた例の範囲で言えば、lightが「来的」、rightが「唛的」と注音されている。語彙集には頭音の/l/と/r/が（同一語の反復出現を除くと）計400回弱出現するが、そこでの口偏の付加率を調べてみたところ、/l/で16%、/r/で68%であった。これは、注音者が/l/と/r/の発音を区別し、凡例に説明はないが口偏の有無によって両者を書き分けようとしていることを意味するものと筆者は推定する。この問題は『華英通用雑話』の注音者を考える際に再び取り上げ、さらに少々立ち入って分析する（後述）。

/r/については、まれに例外的な注音が見られる。次のような例における「児」は/r/の子音だけを表している。

三 thRee 地兒衣 [三字合念] (1a)、三桅船 thRee-masted ship 地兒衣 [三字合] 馬士忒 失必 (12b)

ごく一部の場合にのみこのような注音を用いた理由は不明であるが、いずれにせよそれらも/l/と/r/を弁別し、書き分けようとする意図の現れと見ることができる。

3.3.4 末音の/l/、/r/

末音の/l/は、まれに表示がないこともあるが、ほぼ一貫して直前の漢字と「力」——と

²² 以後の挙例においては、複合的な語句や文例の一部だけを示すことがある。なお、同一の学習書でも場所によって同一の語の注音が異なることがあるので、本文に挙げる表記が当該学習書における当該語の発音の唯一の表記であるとは限らない。

きに「里」——の組合せの「合」として注音されている。²³

皆 aLL 阿力 [合] (6a)、小 smaLL 士馬力 [三字合] (12b)、先生 schooLmaster 士谷力
 搥士撻 [「士谷力」三字合] (25a)、塩 saLt 薩力的 [三字合] (11b)、建房子 buiLd a house
 唎力的 阿厚士 [「唎力的」三字合] (24a)、素紬 plain siLk 必連 士力及 [三字合] (7b)、黄
 金 goLd 古里的 [三字合念] (3b)、紋銀 sycee siLver 顛西 西里法 [「西里」合] (3b)

末音の /r/ もとときに表示がないことがあるが、直前の漢字と「兒」の組合せの「切」として注音されている。ただし、「切」は同時に「合」でもあることから混乱が生じがちで (3.3.2)、「合」と表示されている場合もある。

十四 fouRteen 呬兒嘸 [「呬兒」切] (1a)、年 yeaR 葉兒 [切] (20b)、大麦酒 beeR 唎
 兒 [切] (12a)、顔色 coloR 各羅兒 [「羅兒」切] (8a)、四 fouR 呬兒 [二字合念] (1a)、短
 shoRt 沙兒的 [三字合念] (3a)、珠殼 mother o' peaRl 嗎啞 阿 巴兒力 [三字合] (7a)、籐
 貨 rattan woRk 啦当 屋兒及 [「屋兒及」三字合] (6b)

次のような事例においては語中の /r/ を前後のどちらの音節に属すると見るかという問題があるが、『華英通用雑話』は前の音節の末音と見なして注音している。

男 baRon 叭兒噁 [「叭兒」切] (25b)、荒地 baRREN land 扒兒噲 蘭的 [「扒兒」切] (22a)、
 珊瑚 coRal 各兒阿力 [「各兒」切、「阿力」合] (5b)、紅蘿苧 caRRots 加兒屋的士 [「加兒」切(た
 だし不表示)、「屋的士」合] (11a)、娶親又出嫁 maRRy 搖兒噎 [「搖兒」切] (29a)

ほかに「兒」によって R 音性母音 (rhotacized vowel) [ə] を示した次のような例もわずかに見られる。

清早 EARly 兒厘 (21b)、伯 EARl 兒力 (25b)²⁴

²³ Wells (1982b) によれば、現代のスコットランド英語には「明るい」(clear /l/) と「暗い」(dark /l/) の区別がなく、グラスゴウの日常語では [ɒ] 的な響きを持つ咽頭化した /l/ の変種が聞かれると言う。もっとも、Bridgman (1847) に引用された *The Glasgow Chronicle* 紙の記事によれば、トームは若いときに 5 年間リバプールで働き、その後中南米などにも住んでおり、『華英通用雑話』における注音がどのような英語の発音に基づいて行われたかは不明である。

²⁴ さらに例外的に「兒悪 cruEL 及嚙兒」(38b) では [ə] の注音に「兒」が使われている。

3.3.5 注音の方言的基礎と注音者

『華英通用雑話』の注音は中国語のどの方言に基づいているのか。この問題に関しては互いに矛盾する事実が存在する。

まず、著者のトーム自身は、巻末最終葉の‘To the Reader’と題した英文で、英語発音の表記は‘the Peking or Court dialect’、すなわち、北京官話における漢字音によったと明言している。頭音、末音ともに /l/ と /r/ が区別して注音され、特に末音の /r/ の注音に「児」——広東語での発音は ji4 であり、流音の注音には適さない——を用いていることはトームの説明に符合する。

しかし、その一方で、『華英通用雑話』の注音には南方方言の要素が見られる。このことはつとに内田（1997）が指摘している。内田によれば、『華英通用雑話』では名詞複数語尾 -s を「士」で表しているが当時の北方音では「士」はすでに捲舌音であったはずであり、/k/ を「及」で表しているが北方音では「及」はすでに口蓋化していたはずであり、six を「昔士」と表記しているが北方音では「昔」は入声音でなくなっていたはずである。

以上の事実を両立させるにはやはり、トームの意図した北京官話音による注音に南方音の要素が混入したと解釈するのが妥当であるように思われる（拙論（2018））。

では、『華英通用雑話』の注音者は誰だったのか。この問題についても注音の状況が示唆するところは両面的である。

ごく単純に考えれば、注音者は著者のトームだったということになるであろう。そして、実際その見方を強く示唆する事実がある。それは、『華英通用雑話』における注音に見られる顕著な特徴、すなわち、英語の音節の一貫した認識である。「切」と「合」の使用はその認識の具現化にほかならない。例えば price という語は『紅毛番話貿易須知』では「敝磻士」——広東語の発音は bai6 laail si6——と注音され（4a）、『華英通用雑話』では「白来士」の「三字合」と注音されている（13b）。一見ほとんど同等の注音のようにも見えるが、小字で添えられた「三字合」はあってもなくてもよい性質の注記ではない。それは、price を漢字表記の表す3音節として発音してはならない、1音節として発音しなければならないということの明確な指示である。「切」「合」は『華英通用雑話』のすべての語句、文例に高い精度で書き添えられている。そのようなことができたのは注音者が英語の音節を体得している母語話者であったからだと考えるのが自然である。ちなみに、「合」の表示は後の英語学習書にも継承されるが（後述）、そこではもはや一部の語に不透明な基準でしかも気紛れに添えられるに過ぎず、『華英通用雑話』の意図した、一貫した音節の明示という目的からは大きく後退している。

しかし、注音者が英語の母語話者であったと断定することをためらわせる事実もある。それは、頭音の /l/ と /r/ が口偏の付加の有無によって書き分けられていると見られるものの、

その書き分けが完全ではないことである (3.3.3)。語彙集に 165 回現れる頭音の /l/ のうち 26 件 (16%) には口偏が加えられている。また、222 回現れる頭音の /r/ のうち口偏が付加されていないのは 72 件 (32%) であるが、その音声的な文脈を確かめてみると表 2 のようになる。

表 2 口偏を欠く頭音の /r/ の注音 72 件の音声的文脈²⁵

		件数	例
非音節冒頭		66件	印花布 pRINts 必令的士 (5a), 褲子 tROUsers 的漏薩士, 縐紗 cRApes 茄力必士 (7b)
音節冒頭	非語頭	5件	一分 one candaREEN 温 刊的連 (3b), 憲諭 mandaRIN's edict 蛮打連士 意忒 (37a)
	語頭	1件	羅馬 ROme 羅馬 (39a)

この表から、口偏の“付加漏れ”は /r/ の調音時間が短い文脈——特に、別の子音に後続する非音節冒頭の位置——に集中していることが分かる。²⁶ これは、注音が非母語話者による英語音声の不完全な知覚に基づいて行われたことを示唆するもののように思われる。母語話者であればいかなる条件下においても /l/ は /l/ として、/r/ は /r/ として認識したと考えられるからである。

今若干の根拠を示して言い得るのはそこまでである。巻頭における英字の発音の解説および凡例における注音に関する説明には多数の満州語の事例が併記されている。しかし、トームが広東語に習熟していたことは序文における記述から知られるが、満州語を学んだという事実は確認できない。『華英通用雑話』における注音者が 1 人であったと考えなければならない理由はなく、むしろ注音はトームと中国人協力者の合作の結果であったのかも知れない。もっとも、注音作業の分担の内容が分からない以上、そのような可能性を述べてみても想像の域にとどまらざるを得ない。²⁷

²⁵ 表中の mandarin's edict の注音が「～意忒」で終わり、その続がないのは原文の通りである。

²⁶ 表の最後にある Rome の注音「羅馬」は語頭の位置でありながら例外的に口偏を書いている。これは見出し語と一致していることから考えて、当時すでにそのような発音の地名として知られており、それがそのまま注音に使われたものと見られる。「羅馬」は早くマテオ・リッチ (Matteo Ricci, 利瑪竇) の『坤輿万国全図』(1602 (万曆30) 年) に現れる。

²⁷ 念のため付言すれば、『華英通用雑話』の注音に南方方言的要素が見られるという事実から、注音者がトームではなく中国人だったと推論することはできない。トームは広東語に通じていたからである。

3.4 鄭仁山『華英通語』（『華英通語』道光本）

3.4.1 資料の概要

『華英通語』は19世紀中葉以後に中国人によって編まれた、語彙集と会話文例集を主な内容とする英語学習書で、複数の版が残存している。鄭仁山なる人物による序文に1849（道光29）年の日付の記された『華英通語』が大阪大学附属図書館にあり——「道光本」と呼ぶ——、おそらくこれが『華英通語』の最初の版である。そして、本文の作者も鄭仁山であったと推定される。

『華英通語』道光本はトームの『華英通用雑話』上巻に範を取り、西洋人宣教師による広東語入門書2点を併用して編まれている。ただし、『華英通用雑話』の語句や文例は基本的に北京官話によっているが、道光本では引用時にそれを広東語に書き直している。

肥地 <i>rich land</i> 石治 連地	山地 <i>hill country</i> 希心 斤地	華 英 通 語
野地 <i>desert land</i> 帶治咽 連地	平地 <i>flat country</i> 伏律 斤地	
城裡 <i>inside city</i> 烟西 失地	荒地 <i>barren land</i> 巴倫 連地	地 理 門
城外 <i>outside city</i> 區西 失地	水田地 <i>paddy land</i> 水地 連地	

図10 『華英通語』道光本（第54葉裏）²⁸

3.4.2 注音字の大小

『華英通語』道光本では次のように注音の漢字の一部が小字で記されている。

殺 kill 基尤 (71a)、説 tell 嘜尤 (74b)、五 five 輝肥 (1a)、六 six 昔時 (1a)、睇見 look 碌忌 (80a)、猪油 pork fat 博駕 弗地 (14b)

²⁸ 注3で述べた日本人学習者による書き込みはここでも消去して示した。

小字の漢字はおおむねその声母だけを発音することを示しているものと見られる。『華英通用雑話』の「合」と同様の目的を持つと言える。そして、「合」では組み合わせられた複数の漢字の読みに関して曖昧性を生じるという欠陥があったが(3.3.2)、小字による表記にはそのような問題はない。²⁹

しかし、道光本における小字の使用は一貫しておらず、小字にするのを忘れたと見られる例や大字か小字か見分けにくい例が多いのみならず、大字で書くべきものを小字にした例も少なくない。

清早 early 靴尤 (7b)、山地 hill country 希尤 斤地尤 (54b)

この2例の注音には小字の「尤」が計3回現れるが、本来小書すべきはhiLLの「尤」だけである。小字の「尤」は末音の/l/の注音によく使われており(後述)、その影響で大字を誤って小書してしまう混乱が起きやすかったのであろう。道光本の注音の分析に際しては、文字の大小はそのまま信用することができないことになる。

漢字の大小の使い分けにはそのように混乱や不統一が多いので、以下の引用はすべて通常の大きさの文字による。³⁰

3.4.3 頭音の/l/、/r/

『華英通語』道光本において頭音の/l/と/r/は、『啖咭喇国訳語』および『紅毛番話』類の話彙集の場合と同じく、後続の母音ないし母音と子音の連鎖との組合せがL音字で表されている。/l/と/r/は書き分けられていない。

輕 LIght 黎地 (67a)、LIght lamp time 吼地 纜布 咭 (7b)、管店 cooLIE 姑尤 (42b)、衙門 puBLIC office 巴庇力 鴨化士 (48b)、百万 one miLLION 温 美倫 (3b)、長

²⁹ 小字による表記では音節の単位が示されないので、『華英通用雑話』の注音法より全面的に優れていると言えるわけではない。なお、『華英通語』道光本でも「nine 乃因_合」(1b)のように「合」を添えた例があるが、『華英通用雑話』の注音の残存に過ぎず、分析上注意を払う意味はない。

³⁰ 注音の小字については道光本の凡例に「凡所音之英字者内有細字此乃刪尾音喉音務宜考究。」という説明があるが、筆者には文の構造も意味も正確に解釈することができない。道光本の改訂版と見なし得る咸豐5年本(後出)の凡例には「凡漢字内有小字務於牙舌唇齒喉五音弁別清楚方与英語相肖，不然是差之毫釐而謬之千里矣。」とあり、注音の小字に関して、調音位置に注意して子音を正確に発音する必要があることを説明している。道光本も同じ趣旨のことを述べている可能性があるが、実際のところは不明である。

LONG 嶼 (67a)、肺 LUNGs 冷時 (57a)、平地 fLAT country 伏律 斤地尤 (54b)

右 RIGHt 吼地 (66b)、白兔 RAbbit 啦必地 (13a)、村郷 countRY 斤地尤 (55a)、煎 fRIEd 吠礼的 (15a)、兄弟 bROther 罷辣打 (39b)、一百 one hundred 温 暇地咧 (1b)、春 spRING 士氷吟 (5a)、疇囑米 cRIMson 忌廉臣 (36b)

例外的に次のような注音もある。

信 TRUst 租時地 (74b)

この「租」——広東語での発音は zou1——は、おそらく /t/ と /r/ の連続の破擦音化した発音（と後続する母音の組合せ）を書き留めたものであろう。

3.4.4 末音の /l/、/r/

末音の /l/ はまれに表示がないが、多くの場合「尤（厘）」——広東語の発音は lei4——によって注音されている。まれに同音異声調の「利」「里」が使われていることもある。

手鐘 beLL 啤尤 (10b)、碗 bowL 褒尤 (10b)、尺 ruLE 魯尤 (52a)、脚魚 turtLE 噠喇尤 (17a)、配馬 saddLE to 失地尤 士 (94b)、銀 siLver 施尤化 (32a)、長枕 boLster 波利士啞 (24a)、斜紋布 twiLLed cloth 堆里的 個羅素 (35b)

「尤」の代わりに、それとは異なる母音を持つ L 音字が使われている場合もある。

罇 bottLE 吧啞刺 (10b)、小 smaLL 士麼刺 (68a)、苹果 appLE 鴨布焗 (22b)、書館 school 士姑焗 (49b)、旧 oLd 澳焗的 (67a)、籠総 aLL 阿羅 (79a)、酸菓 pickLEs 吡駕羅時 (19a)、孟加拉 bengal 孟加拉 (45b)

これらの事例はいずれも先行する母音への同化の結果と見られる。「尤」を使う大多数の場合との違いは不詳であるが、平易な語句が多いことから考えて、すでにそのような語形が普及していた——そして、新しく注音した語には「尤」を使った——ということかも知れない。少なくとも最後の例の Bengal については、見出し語と注音がほぼ一致しているので、そのような発音の地名として知られていたらしいことが分かる。

末音の /r/ は基本的に注音されていない。

聞 heaR 唏[・] (73a)、啤酒 beeR 啤[・] (19b)、信 letteR 咧[・] (28a)、馬 hoRse 蝦[・]
時 (64b)、大 laRge 拉[・]治 (66b)、穢 diRty 撻[・]地 (71b)

なお、末音の /l/、/r/ を含む次のような語の発音が「也」を使って表記されていることがある。

面巾 towel 兜[・]也 (26a)、花 flower 阜[・]葵也 (64a)、状師 lawyer 唛[・]咄 (41b)、門 door
多[・]也 (50b)

しかし、この「也」はその発音——jaa5——から考えて、流音自体と言うより、流音の直前の母音——ないし母音と流音の連続——を表すものと解釈するのが適当であろう。

『華英通語』道光本における英語の流音の注音は概略以上の通りであるが、実際には一見理由の分かりにくい混乱や不統一も見られる。これについては節を改めて次に述べる。

3.4.5 注音の方言的基礎、注音の不統一

『華英通語』道光本は広東語の話者のために編まれた英語学習書である。『華英通用雑話』から取られた文例も広東語に書き換えられている。例えば次のごとくである。

^(會)尔^(不)曉講漢話唔呢 can you speak chinese? (101a)
^(通)呢件物係^(是)乜野^(什麼)價錢呢 what is the price of this? (102b)

このことから、また、注音に見られる入声の利用その他の事実からも、道光本の注音が基本的に広東語に基づいていると考えることに疑問の余地はない。

しかし、道光本の注音が純粋に広東語的であるわけではない。流音の注音に見られる不統一、混乱の核心的な部分について述べれば次の通りである。例えば、末音の /r/ を「児」によって注音した次のような例がある。「児」の広東語での発音は ji4 であるので、これは北方方言の発音に基づくと思われる。

顔色 coloR 各羅[・]兒 (62a)、皮草 fuRs 花[・]兒時 (39a)、禮拜六 SatuRday 薩打[・]兒爹 (5a)、
挨晚時 neaR evening 呢[・]兒 衣乎寧 (7b)

また、末音の /r/ が「尤」を用いて注音されている場合もある。これは特に北方的である

とも広東語的であるとも言えない。

一年 one yeaR 温 喻尤 (6b)、彫牙器 caRved ivory ware 咖尤肥 喉鼻尤 喊也 (32b)

筆者の見るところによれば、「児」の使用は『華英通用雑話』における表記の残存である。color 以下の語句はいずれも『華英通用雑話』から借用されたもので、そこでの発音表記は「各羅児」「弗兒士」「薩得兒爹」「尼兒 衣吩寧」である。³¹そして、「尤」は『華英通用雑話』の「児」を置き換えた結果である。one year 以下の語句の『華英通用雑話』での発音表記は「温葉兒」「咖兒啞 喉呖里 喂兒」である。

『華英通用雑話』は末音の /l/ と /r/ をそれぞれ「力」の「合」、「児」の「切」で表していた (3.3.4)。『華英通語』道光本の著者は /l/ の注音字を「力」から入声のない「尤」に変えたが、/r/ の注音については判断に迷い、「児」を省くことにしたものの、/l/ にならって「尤」に変えたものや「児」がそのまま残ったものがあったということだと考えられる。

こうした推定を前提として道光本における流音の注音を見れば、その不統一、混乱にも説明が付く。先に、道光本では four という語が「科尤」とも「科児」とも注音されていることを見た (2.2.1)。

四 fouR 科尤 (1a)、九千零零四 nine thousand and fouR 乃因 兜臣 噯 科児 (3a)

『華英通用雑話』における four の注音は「仏児」の「切」——ときに「合」(3.3.2)——である。筆者の理解によれば、道光本では four は本来「科児」でも「科尤」でもなく、「科」1字によって注音するのが自然であった。

上記のような変則的な注音が道光本の本文冒頭から出現するので、分析上非常に紛らわしい。頭音の流音についても、例えば thREE が「地簾」(6b)、「地尤簾」(1a)、「地兒簾」(12b) のようにさまざまに注音されている。『華英通用雑話』において three は「地兒衣」の「三字合」と注音されていた。道光本では「地簾」と注音すべきところ、『華英通用雑話』の注音が例外的である (3.3.3) ことも手伝って混乱が生じたものと考えられる。

『華英通用雑話』との関係において説明することのできない例外的な流音の注音もあるが、ごくわずかである。

³¹ このような事例は文例集に多く見出される。例えば文例に反復して現れる your、are はしばしばそれぞれ「夭兒」「丫兒」と注音されている。それらの語の『華英通用雑話』における注音は「尤児」「阿児」である。

素紬 plain siLK 怕嚇 些瀝 (34a)、洋蠟燭 earth³² candLE 兒時 堅爾 (36b)

最初の例では「瀝」の入声を利用して /k/ も併せて注音している。第2の例は earth の注音に「兒」を使っている点です。すでに道光本らしくない。後者の項目は出典を確認できていない語の1つであり（拙論（2018））、北方音によって注音された未知の資料からの引用であった可能性がある。

3.5 子卿『華英通語』（『華英通語』咸豐5年本）

3.5.1 資料の概要

1855（咸豐5）年に出版された『華英通語』——「咸豐5年本」と呼ぶ——は『華英通語』道光本を基礎とし、西洋人による広東語入門書数点を用いて内容を大幅に組み替えたものである。何紫庭を名乗る人物によって書かれた序文は同書の子卿なる人物の著作と説明しているが、何紫庭、子卿ともに実在の人物の実名であったかどうか不明である。道光本と同じく、広東人のために編まれた英語学習書である。

地 平 <i>Flat country</i> 父律 斤地七	湖 <i>Lake</i> 叻忌
地 荒 <i>Barren land</i> 狂噠 嚨	河 <i>River</i> 器花
地 肥 <i>Rich land</i> 兒答 治 嚨	崗 <i>Hill</i> 希倪
地 野 <i>Desert place</i> 吧 刺 啤 七 時	地 山 <i>Hill country</i> 希倪 斤地七

図 11 『華英通語』咸豐5年本（第8葉裏）

調査は東北大学附属図書館狩野文庫蔵本による。

³² 原文では判読不能の書き方になっているが、意味と注音に基づいて earth と推定した。

3.5.2 頭音の /l/、/r/

『華英通語』咸豊5年本における頭音の /l/ は、これまでに見てきた英語学習書と同じ方法でL音字によって注音されており、特筆すべきことはない。

湖 LAke 叻忌 (8b)、軽 LIght 礼特 (119b)、笑 LAUgh 拉父 (121a)、失 LOse 羅時 (121a)、睡 sLEEP 時獵 (121b)、帶水 piLOT 卑嘩 (15a)、時辰鐘 cLOCK 哥略 (53a)、淨 cLEAN 咖嚏 (120a)、海島 isLANd 埃囉 (7a)、羊仔 LAMB 囉 (70a)

筆者の気付いた例外は次の注音だけである。

京 ten miLLIONs 顛 嘆仁時 (24a)

「仁」の広東語での発音はjan4であり、/l/を省いて注音した形になっている。前葉にある「一兆 one miLLION 温 美倫」(23b)ではL音字が使われている。

他方、/r/に関しては、『華英通語』咸豊5年本は独自の表記法を導入している。すなわち、/r/は多くの場合、L音字の前に「兒」——または、その異体字として使われていると見られる「倪」——を添えた2字の組合せによって表されている。『華英通用雑話』を模倣してしばしば2字の下に小字の「合」を添えているが、「合」がない場合も非常に多い。ここでは「合」の表示は省いて引用する。

河 RIver 兒吮花 (8b)、右 RIght 倪礼特 (123a)、真 tRUE 都倪路 (120a)、擦 RUB 倪筮 (121b)、雨 RAIN 倪嚏 (5b)、仏瑯西 fRANce 父兒蘭時 (107a)、朋友 fRIENd 父兒連 (14a)、太子 pRINce 嘸兒嚏時 (10b)、破 bREAK 嘛倪叻 (124a)

『華英通語』咸豊5年本の凡例には「凡漢字内有倪字者須以華人正音調之。」という説明がある。文字通りに“「倪」を正音で発音する”と読むと音価上理解できない話になるので、説明の趣旨はおそらく“注音に含まれる「兒」（「倪」とも書く）は中国語標準音で発音する”ということであろう。L音字への「兒」の前置は、rの音を持たない広東語による注音の制約を北方方言の要素の援用によって緩和し、英語の発音をより正確に示そうとする著者の新たな試みだと言える。

L音字への「兒」前置の目的は、r音の補強、すなわち、/r/の母音的な響きを強調して示すことであろう。英国人によって編まれた『華英通用雑話』では/l/と/r/が区別して注音されていたが(3.3.3、3.3.4)、中国人による英語学習書において/l/と/r/の弁別意識を確か

め得るのは本書が最初である。そして、この /r/ の注音の方式は以後の英語学習書でも広く用いられることになる。³³ 学習書によっては「児」の代わりに「而」や「胡」の漢字が使われるが、原理は同じである。日本人の英語学習の文脈で言えば、right の発音を「ウライト」と書くようなものである。³⁴

この方式の導入により、次のような例では1語中における /l/ と /r/ の発音の書き分けが可能になっている。

塘蒿 ceLERY 施拉倪尢 [「倪尢」合] (44a)、情願 fREELY 父倪尢尢 [合の表示なし] (137b)

もっとも、書き分けが完全に行われているわけではなく、/r/ の注音に「児」を用いていない例も多い。また逆に、/l/ の注音に「児」を添えた例も比較的少数ながらある。

写字箱 WRItting desk 吼丁 尼時忌 (79a)、憂悶 soRRY 梳尢 (139a)、証拋 pROOf 歩路父 (30a)、蟹 cRAB 加笠 (71b)、紅蘿蔔 caRROT 加律 (45b)、洋鉄 foREIGN iron 科噠 埃兒噠 (55a)、魚膠 isingLAss 衣星呀兒拉時 (55a)、牛皮膠 gLUE 呀兒嘮 (54b)

このうち54b、55aにおける計4件の誤り、不統一は先に示した図2に含まれていたものである (2.1.3)。

なお、次の例においては、「児」がL音字ではなく、母音で始まる漢字と組み合わせられている。

男 baRon 孖兒安 (10a)

同様の事例は筆者の見落としがなければほかにはない。「児」を子音 /r/ の表示に使うこ

³³ 『華英通用雑話』にも一見同様の方法による /r/ の注音に見える例がある。「伸冤 to redress WRONGs 土 喱得勒士 兒浪士 [「兒浪」切、「浪士」合] (38a) という注音がそれである。しかし、「兒浪」の「切」と示されており、それに基づいて解釈すれば「浪」の声母のlは発音されないことになる。いずれにせよ類例は見当たらず、『華英通用雑話』が「児」とL音字の組合せによって頭音の/r/を表そうとしたと一般化することはできない。

³⁴ その古い実例としては、田村維則『初学者英語発音指鍼』(吉岡商店、1887(明治20)年)が、「英人ハ元来rノ音ヲwr(ウル)ノ如クニ発音スル習慣アリテrightノ如キwノ之ニ前接スルコト無キ語ト雖モ亦wright(ウライト)ノ如クニ発音スルナリ」と述べている。また、それよりもはるかに古いおそらく幕末の例として、大阪大学附属図書館蔵の『華英通語』道光本のrunの項目(71b)には日本人学習者がその発音を「ッラン」と書き込んでいる。

の注音方式は本来応用の範囲が非常に広いはずである。それにもかかわらず類例がないということは、「児」は基本的に子音 /r/ を表示するためのものではなく、/r/ の表示の主役であるL音字にr音の響きを添える補助的な手段に過ぎなかったということであろう。

3.5.3 末音の /l/、/r/

末音の /l/ の注音はほとんどの場合「児」ないし「倪」によっている。「児」「倪」は小字で書かれている場合もある。意図された発音は上で議論した標準音の「児」であろう。

草鞋 sandaL 山嶂児 (37b)、面衣 veiL 喊児 (39a)、疾病 iLL 衣倪 (47a)、細 smaLL 時摩倪 (123a)、眼鏡 spectacLE 時逼爹斤倪 (38b)、十二 tweLve 都喊倪乎 (22b)

ただし、まれに次のようにL音字が使われている場合もある。

糸 siLk 糸叻忌 (32a)、鹹菜 pickLED green 逼忌列 忌噀 (72b)、磅碼 weights & scaLEs 喊時 噀 時茄尤時 (140b)

「糸叻忌」の広東語での発音はsil likl gei6である。絹は貿易の重要な商品であることから外来語として[siliki]のような発音で定着しており、それが記されたという可能性もある。しかし、「網簾 siLK curtain 施叻 加顛」(74b)のように違う音声に変換されている——上掲の例と異なり、「忌」がない——場合もあるので、³⁵ 正確なところは分からない。第2の例では語末の /d/ も併せて示すために「列」が選ばれたものと見られ、実際ほかの過去分詞にも類例がある。第3の例は道光本における注音の残存である。³⁶

末音の /r/ は表記されていない。

四 fouR 科 ϕ (22a)、遠 faR 花 ϕ (123a)、短 shoRt 嚙 ϕ 特 (119b)

巻頭の英字の説明において r の字の読みが「亜倪」「唾倪」として示されているのがおそらく唯一の例外である。³⁷

次のような「Y」——広東語の発音はaal——の使用は『華英通語』道光本における「也」(3.4.4)と同様のものであろう。

³⁵ 道光本にはsiLKを「些瀝」と注音した例があった(3.4.5)。

³⁶ 道光本での注音は「喊地時 噀 時茄尤時」であり、咸豊5年本では「地」が脱落している。

³⁷ 英字の説明においては、lの字の読みもrと同じく「亜倪」「唾倪」によって示されている。

倦 tire 低 Ĩ (121b)、懼 fear 啡 Ĩ (122a)、整 repair 倪尤啤 Ĩ (122a)

3.5.4 注音の方言的基礎

『華英通語』咸豐5年本の注音は、広東語を基礎とし、頭音の /r/ における r 音の補強および末音の /l/ の表示に北方方言の発音における「児」——およびその同音字として使われていると見られる「倪」——を用いている。

「児」は道光本にも見られたが、それは『華英通用雜話』の注音の残存であり、単なる注音の混乱の現れに過ぎなかった。咸豐5年本における発音表記にも不統一の要素は見られるが、資料全体の観察から、/l/ と /r/ の区別を認識し、書き分けの方針を定めたうえで注音が行われていると結論付けることができる。

3.6 子芳『華英通語』（『華英通語』咸豐10年本）

3.6.1 資料の概要

『華英通語』咸豐10年本（1860（咸豐10）年）は『華英通語』咸豐5年本を基礎とし、語句や文例に加除を施し、英語の発音表記に調整を施したものである。両版の内容は共通性が高い。拙山人を名乗る人物による序文は作者を子芳と説明しているが、咸豐5年本の場合と同じく、拙山人も子芳も仮名であった可能性がある。

地 平 <i>Flat country</i> 父律 斤地儿	湖 <i>Lake</i> 叻忌	子 芳 通 語
地 荒 <i>Barren land</i> 巴哩 喃	河 <i>River</i> 叻 話	
地 肥 <i>Rich land</i> 叻 治 喃	崗 <i>Hill</i> 希倪	
地 野 <i>Desert place</i> 翁 刺 啤 心 時	地 山 <i>Hill country</i> 希倪 斤地儿	

図12 『華英通語』咸豐10年本（第11葉裏）

調査は大阪大学附属図書館蔵本（巻上のみ）およびハーバード大学図書館の Web サイト（<https://library.harvard.edu/>）で公開されている同大学燕京図書館蔵本（巻上、巻下）の画像による。

3.6.2 咸豊5年本における流音の注音からの変更

『華英通語』咸豊10年本は序文で、“咸豊5年本の注音の誤りを正した”という趣旨のことを述べている。そして、流音の注音についても変更を施している。しかし、最も重要な点において実のところそれは咸豊5年本の注音の改善ではなく、その改悪、そこからの後退となっている。

咸豊5年本はすでに見たように、頭音の /r/ の注音には L 音字の前に「児」の字を加える——そして、しばしば「合」の表示を添える——という方法によって /l/ と /r/ の書き分けに意を注いでいた。ところが、咸豊10年本の作者は咸豊5年本のその意味を理解できなかつたと思しく、一律に「児」の字を「合」の表示とともに削除している。3例を挙げれば次の通りである。最初の例の変更は図11と図12を比べれば確かめることができる。

河 RIVER 児吮花（咸豊5年本8b）→ 吮話（咸豊10年本11b）
 衢 ROAD 児噓（同上9b）→ 噓（同上12b）³⁸
 雨 RAIN 倪噓（同上5b）→ 噓（同上8b）

無論、咸豊10年本で新たに追加された語句に含まれる頭音の /r/ の注音にも「児」は使われていない。

橋 bRIDGE 罷列治（13a）、樹林 foRESt 科喇士（13b）

流音に関わるほかの変更としては、咸豊5年本で末音の /l/ が「児」の注音を欠いていた箇所それを補っている。

廟 tempLE 咭布 ϕ（咸豊5年本87a）→ 咭布倪（咸豊10年本14a）
 馬房 stabLE 時爹布 ϕ（同上91a）→ 時爹布倪（同上17a）

これは改善ではあるが、注音の方針の改善であるわけではなく、誤りの訂正ないし不統一

³⁸ 咸豊5年本で「衢」であった中国語の見出しが咸豊10年本では「路」に変更されている。

の解消に過ぎない。

結局、咸豊10年本の作者は咸豊5年本の注音の改善を目指したが、少なくとも頭音の /l/ と /r/ に関しては両者の区別のない古い状態に戻ってしまったということになる。

3.7 ^{ふう}馮祖憲『英話註解』

3.7.1 資料の概要

1860（咸豊10）年に出版された馮祖憲『英話註解』は『華英通語』の諸版と同じく、語彙集と会話文例集を主な内容とする英語学習書である。

	橋 <i>Bridge</i> 治立別	田 <i>Field</i> 兜非	東 <i>East</i> 脱同衣
	堤 <i>Embankment</i> 鉄明克排細爰	石 <i>Stone</i> 吳多司	南 <i>South</i> 司掃
地 理 門	閘 <i>Lock gate</i> 脱戡克落	山 <i>Hill</i> 而赫	西 <i>West</i> 脱同回
	井 <i>Well</i> 而淮	嶺 <i>Mountain</i> 听忙	北 <i>North</i> 司拿
	溝 <i>Ditch</i> 茄苗 汕	路 <i>Road</i> 羅而 塔	地 <i>Land</i> 脱蓋 岸

図13 『英話註解』（第3葉表）

調査は早稲田大学古典籍総合データベース (<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>) で公開されている同大学図書館蔵本の画像による。

3.7.2 『華英通語』との違い

『英話註解』は一見したところ『華英通語』によく似ているが、内容上2点の大きな違いがあることを内田（1997）が指摘している。

第1に、『華英通語』はもっぱら正統な英語を教える学習書であったのに対し、『英話註解』

の文例はしばしば破格なピジン英語の表現である。例を挙げれば次のごとくである。

内外一様 Inside outside all same. (74a)

此茶不要 This tea no want. (76a)

久不見你 Long time no see you. (78b)

もっとも、全巻を通してピジンの表現であるわけではなく、語彙集のうち単純語と複合名詞を内容とする「老字語門」までの範囲にはピジン英語を思わせる要素は見出せない。

第2に、『英話註解』の注音は、広東語でも北京官話でもなく、寧波方言に基づいて行われている。例えば、次のような注音はその寧波方言での読みを前提としている。

分 diVIde 地凡脱 (57a)、短 SHORt 孝脱 (54a)、易 eaSY 意徐 (57b)

「凡」「孝」「徐」の現代の寧波方言における発音はそれぞれ vae、shio、zhi である。sh、zh はそれぞれ [ʃ]、[ʒ] を表す。³⁹

以下に、『英話註解』における流音の注音の特徴的な要素を簡単に述べる。

3.7.3 流音の注音

頭音の /r/ はしばしば L 音字の前に「而」——寧波方言での発音は r ——を加えて注音されている。特に語頭に位置する /r/ の場合にそれが多い。まれに「而」の代わりになぜか L 音字の「落」が使われていることもある。

江 RIver 而勒仏 (3a)、米 rice 而來司 (27a)、狭 naRROW 乃羅 (54a)、竜 dRAGON 特藍哨 (34a)、肥地 RIch land 立次藍 (4b)、雨 RAIn 落雷行 (2a)

末音の /l/ は「而」、まれに「兒」——発音は同じく r ——で注音されている。

井 weLL 淮而 (3a)、満 fuLL 福而 (54b)、学堂 schooL 司苦而 (17b)、冷 coLd 可而 (5a)、金 goLd 個而脱 (40a)、田 fieLd 非兒 (3a)

³⁹ 寧波方言の発音の表記は、呉語協会のWebサイト (<http://wu-chinese.com/>) で公開されている『呉音小字典』による。声調は省いて示す。

末音の /r/ は注音されていないことが多いが、ときに「而」、まれに「兒」で示されている。

貧 pooR 破 $\dot{\phi}$ (57a)、前 befoRE 別福 $\dot{\phi}$ (54a)、虎 tigeR 泰軋而 (34a)、鳥 biRd 剖而
脱 (34a)、木星 jupiteR 綱比得兒 (2a)

また、次のような注音はいずれも、『華英通語』で見られた「也」「丫」による注音と同性質のものと見られる。

清 cleAR 克利也 (54b)、火 fiRE 泛爺 (55b)、鹿 deeR 地欧 (34b)、髮 haIR 海鞋 (33a)、
近 neAR 泥害 (54a)、梨頭 peARs 批后司 (29a)

「也」「爺」「欧」「鞋」「害」「后」の発音はそれぞれ ya、ya、eu、gha、ghe、gheu である。
gh は有聲声門摩擦音 [ɣ] を表す。

3.8 唐廷枢『英語集全』

3.8.1 資料の概要

『英語集全』は1862(同治1)年に出版された6巻から成る英語学習書である。著者の唐廷枢は広東香山県に生まれ、香港のモリソン学校——ロバート・モリソンを記念して組織されたモリソン教育協会 (the Morrison Education Society) が1839年に開設した学校——で教育を受けた人物である。

『英語集全』は『華英通語』咸豊10年本のわずか2年後に出版されたものであるが、内容の量のみならず、質の面においてもそれまでの英語学習書と一線を画している。『華英通語』の諸版は西洋人の著した『華英通用雑話』や各種の広東語入門書から語句や文例を寄せ集めるという方法で編まれていた(拙論(2018))。『英語集全』についてはそのような依拠資料を確認することができず、内容はおそらく著者によって独自に準備されたものと考えられる。そして、同書はそれ以後の英語学習書の編集に広く利用された(後述)。

調査は『華英通語』咸豊10年本と同じく、ハーバード大学図書館のWebサイトで公開されている画像による。本稿での考察の目的には全巻の内容を確かめるまでもないと考えられるので、巻一のみを調べる。

なお、『英語集全』では中国語の語句の発音も英字で示されているが、事例の引用に際してそれは省く。また、注音ではしばしば複数種類の補助記号が併用されているが、当該の文脈での議論に関係しない記号は省いて引用する。

音樂 Musical instruments 妙音、土厘、地、管、文。	
琴 Harp - Clav 羽地。	瑟 Harp - Sharp 峽。
鼓 Drum - Drum 地、林。	戰鼓 Warlike - Battle drums 地、厘、地、林。
椰鼓 Pipa - Banjo drums 干、矢、地、地、林。	懷鼓 Waikie - Harp drums 乎、咧、地、地、林。
靈鼓 Sagoko - Scandaria 隔、播、連。	腰鼓 Ya ho - Banjo drums 維、土、地、地、林。
鼓 Ho ho - Bells drums 隔、地、厘、地、林。	羯鼓 Hakki - Harp drums 徑、地、林。

図 14 『英語集全』（巻一第 62 葉表）

3.8.2 注音の特徴

『英語集全』では英語の発音の表記も多く、その点に関してそれ以前の大半の英語学習書よりはるかに精密で一貫性の高いものになっている。そして、その注音の方針を明確かつ詳細に説明している。同書における発音表記についてはすでに矢放（2009, 2016）に広東語の音韻論を踏まえた考察がある。

巻一の本文の前に置かれた「切音撮要」では、既存の漢字に口偏を加えることによって、韻母を別の漢字の韻母で置き換えた音節を表すことを多数の漢字について個別に定義している。例えば、「唏」は「希這切」と定められている——広東語における「希」と「這」の発音はそれぞれ heil, ze5——。これにより、次のような例に含まれる口偏を付加された漢字は、もとの漢字の韻母を「這」のそれで置き換えた発音を表すことになる。

天堂 HEAven 唏墳 (1a)、侍郎 pREsident 舖喱思頓士 (22a)、小肚 BELly 啤黎 (49b)、
長子 Eldest son 依厘爹士新 (42b)、熱天 hot WEATHER 渴喊打 (20b)

「希」「厘」「卑」の韻母は ei、「衣」の韻母は yi、「威」の韻母は wai であり、それらを「這」

の韻母eで置き換えて読むということである。⁴⁰

また、「読法」における説明によれば、漢字の右脇に添えられた「ゝ」の記号は、その字を“完全には読まず、少しだけ読む”ことを示す。これは、当の漢字は声母だけを発音し、韻母は発音しないということの指示である。縦書きの原文で漢字の右にある「ゝ」をここでは文字の上に移して示せば次のごとくである。

星 Star 士打 (2a)、日蝕 eClipSE 衣其獵士 (1b)、泉水 SPring 士布零 (7a)

この記法はすぐ下で見ると、末音の /l/ の表記にも利用されている。

ほかにも中国語にない [θ], [ð], [v] の子音を表すための記法を考案するなど、『英語集全』の注音から読み取れるのは、著者の唐廷枢が英語の発音に関する高度な知識を有し、それを読者に正確に伝えるために前例のない程度の努力を払っているということである。『英語集全』の注音法に欠点があるとすれば、それは補助記号の種類が多く、また、口偏を添えて作り出された多数の漢字の発音の定義が個別的であるために、学習者がそれらを正確に理解、記憶するには相当の努力を要したはずだということである。

3.8.3 流音の注音

『英語集全』における流音の注音は総体的に『華英通語』咸豊5年本のそれに近い。ここには異なる点だけを述べる。

まず、頭音の /r/ はL音字の右脇に小さな丸印「○」を添えて示されている。ここでは「○」を漢字の上に移して示す。

河 R[○]Iver 利化 (5b)、俄羅斯国 RU[○]ssia 罈蛇 (8b)、雨 RAIN 連 (2b)、街 st[○]RRET 士地列 (8a)、大石 ROCK 洛 (6a)、溪 st[○]REAM 士地廉 (5b)

『華英通語』咸豊5年本における「児」の前置と注音の意図は同等であるが、「児」+L音字の2音節に読まれる心配がないという利点がある。ただし、「児」を使う注音ならば学習者は漢字の知識に頼って読むことができるが、音価を持たない「○」という記号ではそのようなわけには行かないという短所がある。

唐廷枢は「読法」で /r/ を「捲舌音」と説明し、/l/ と区別して発音することの重要性を

40 ここでは「這」の声調の問題は省いて述べた。なお、矢放(2009)は「這」の字は声調だけを示すとしているが、本文に述べた筆者の解釈が正しければ、韻母自体も指定している。

強調している。もっとも、「○」の表示が必要な箇所それが欠けている場合も多い。

次に、末音の /l/ は『華英通語』咸豊5年本と咸豊10年本では「児」の北方音を使って注音されていたが、『英語集全』ではL音字の「厘」で示され、その右脇に上述の「ゝ」の記号が添えられている。「ゝ」の記号にもときに過不足がある。

池 pool 捕厘 (5b)、田 fieLd 非厘地 (7a)、銀山 siLver mine 思厘化売吾 (5a)

語末における /r/ を伴う発音に関して『華英通語』道光本には「也」、咸豊5年本、咸豊10年本には「丫」を用いた表記があったが、『英語集全』では同様の目的に「也」や「亜」の字が使われている。

火 fire 快也 (6b)、関閘 barrier 罷釐亜 (10a)、年 year 夜唾 (13a)

3.9 『英語集全』以後の英語学習書

『英語集全』以後の英語学習書には流音の注音に関して見るべき要素は多くない。以下に、学習書5点の注音について確かめたところを簡単に述べる。

3.9.1 鄺其照『字典集成』第2版

1868（同治7）年に出版された鄺其照『字典集成』にはなく、1875（光緒1）年に出版された同辞典の第2版に加えられた語彙集『雜字撮要』はおそらく『英語集全』に頼って編まれている。

『雜字撮要』における流音の注音は『華英通語』咸豊5年本のそれに似ている。

頭音の /r/ に関してはときにL音字の前に「児」を添えている。しかし、「児」の前置は気紛れにしか行われていないうえに、「児」が誤って後置されている場合もあるなど、『英語集全』の精密周到な注音を確かめたあとで見ると注音の粗雑さが目立つ。

雨 RAIN 児唾、大雨 heavy RAIN 希肥 唾、微雨 little RAIN 列度 児唾（以上1頁）
河 RiVer 厘児化、河源 source of the RiVer 梳士 阿符 咄 厘化（以上9頁）

末音の /l/ は「児」によって注音し、末音の /r/ は注音していない。

小山 hiLL 希児 (6頁)、円月 fuLL-moon 夫児捫 (1頁)、星 staR 士打φ (1頁)

『英語集全』と異なり、注音法に関する説明はない。これは要するに、漢字さえ知っていれば読める通俗的な学習書の水準に戻ったということである。

3.9.2 楊勳『英字指南』

1879(光緒5)年に出版された楊勳『英字指南』も『英語集全』を参考にしていると見られる。ここでは語彙集の開始部分である巻三を用いて流音の注音を確かめる。巻頭の凡例によれば注音は江蘇、浙江の諸方言に基づいており、実際『英語註解』の注音(3.7.3)に近い。

頭音の/r/はL音字に「而」を前置する方法によって表されている。

路 ROAd 而洛特 (7a)、大石 ROck 而老克 (6a)、橋 bRIdge 孛而立治 (7a)、呼吸 bREAth 孛而来此 (32a)、騙 fRAUd 勿而老特 (18b)、春 spRING 史澁而林 (3b)

末音の/l/も「而」で注音されている。末音の/r/は注音されていないことが多いが、ときに「而」で示されていることもある。

小河 canaL 開惱而 (8b)、上控 appeaL 押批而 (20b)、綢庄 siLk shop 雪而克 少澁 (44a)、囿 paRk 派φ克 (6b)、埠 poRt 怕φ脱 (7b)、地 eaRth 安而此 (5b)

3.9.3 黄少瓊^{けい}『字典彙選集成』

1895(光緒21)年に出版された黄少瓊『字典彙選集成』は鄭其照『字典集成』第2版に基づいて編まれており、両書は内容の共通性がきわめて高い。英文扉に‘NEW EDITION’と書かれているが、より古い版の存在は知られていない。ことによっては‘NEW EDITION’というの『字典集成』の新版であることを意味するのかも知れない。しかし、もしそうだとすれば、書名のみならず編者名まで異なり、しかも、序文では『字典集成』に触れることもなく、黄少瓊が自ら複数の辞書などに基づいて編集したかのように述べているのも不審である。

『字典彙選集成』に含まれる『英語撮要』は『字典集成』の『雑字撮要』に基づく語彙集である。『英語撮要』は『雑字撮要』の50の部門の順序を大幅に入れ替えてはいるものの、各部門に含まれる語彙はその掲載順を含めて共通である。大きな違いは、『雑字撮要』の17頁から18頁にかけての内容が『英語撮要』では抜け落ち、結果的に部門が2つ減るなどの変化が生じていることだけである。

英語の注音に関しては、随所で個別の漢字を変更している。流音に関しては、『雑字撮要』が末音の/l/を「兒」で表していたのを、ときにL音字の「路」に変更しているのが粗い観察によって確認できた唯一の実質的な違いである。しかし、変更はまったく気紛れに行われ

ているに過ぎない。

小山 hiLL 希兒（『雑字撮要』6頁） → 希路（『英語撮要』97頁）
 白石山 white hiLL 歪咽希兒（同上5頁） → 不変更（同上97頁）
 南極 south poLE 収付頗兒（同上2頁） → 収付頗路（同上95頁）
 門簾頭 curtain poLE 卡顛補兒（同上65頁） → 不変更（同上125頁）

3.9.4 莫文暢『唐字調音英語』

1904（光緒30）年に出版された莫文暢『唐字調音英語』——凡例には『唐字音英語』という書名が記されている——も英語を漢字で注音した語彙集を含んでいる。

頭音の /r/ は、語頭に現れる場合を中心に、ときにL音字に「胡」を前置して表している。しかし、「胡」のない場合も多い。

河 RIver 胡哩化（14頁）、大路 ROAd 胡老（13頁）、日出 sunRIse 申胡昉時（23頁）、雨 RAIn 嚟吾（12頁）、長袍 RObe 碌彼（53頁）、參 thREE 地厘（5頁）

末音の /l/ はしばしば「路」「勞」その他のL音字で表記されている。

田 fieLd 非路（14頁）、小小 littLE 咧吐路（29頁）、単 biLL 卑勞（167頁）、鐘 beLL 啤勞（164頁）、秋季 faLL 科勞（24頁）、銀鍊 siLver chain 思厘化 妻吾（117頁）、糸線 siLK thread 思力 吐咧（112頁）

ただし、注目すべきは、注音に含まれる後舌母音に続く位置では、末音の /l/ に対応する独立した注音字を欠いた場合も多いことである。

平菓 appLE 鴨蒲 ϕ （61頁）、馬房 stabLE 時梯部 ϕ （46頁）、小 littLE 咧途 ϕ （201頁）、有眼針 needLE 你渡 ϕ （127頁）、脚車 bicycLE⁴¹ 擺食咕 ϕ （163頁）、単 singLE 星故 ϕ （210頁）、珊瑚 coraL 可羅 ϕ （118頁）、鉛筆 lead pencil 咧 篇紹 ϕ （172頁）

おそらくこれは /l/ を注音していないということではない。こうした例は、いわゆる「暗いl」（dark l）の [ɹ] を後舌母音として知覚し、aPPLE、staBLE、liTTLE、neeDLE、

41 原文の bicycle を訂正した。

bicyCLE、sinGLE、coRAL、penCILの大文字の部分を「蒲」「部」「途」「渡」「咕」「故」「羅」「紹」の各字によって注音したものと考えられる。/l/は省かれているのではなく、母音として注音に含まれているということである。より古い学習書中にまれに見られた末音の/l/の非表示例も同様の注音であった可能性があるが、『唐字調音英語』はこの方式を広範に用いた最初の学習書である。⁴²

末音の/r/は注音されていない。

肆 fouR 科 $\dot{\phi}$ (5頁)、星 staRs 時他 $\dot{\phi}$ 時 (12頁)、街市 maRket 孖 $\dot{\phi}$ 傑 (13頁)

3.9.5 卓岐山『華英類語』第2版

1904(光緒30)年に出版された卓岐山『華英類語』第2版は、1895(光緒21)年に出版された同書初版の改訂版である。筆者は初版を参照できていないが、第2版の序文で著者は内容を増補したと説明しているだけなので、注音の方法はおそらく変更されていないと思われる。

『華英類語』第2版に収められた語彙集における英語の流音の注音は、『英語集全』のそれを基礎とし、そこから各種の補助記号を省いて簡略化した形になっている。

すなわち、まず頭音の/l/と/r/はともにL音字によって注音され、『英語集全』で/r/を示すために添えられていた「o」は省かれた。その結果として/l/と/r/の区別は失われた。

軽 LIght 礼 (21頁)、右 RIght 礼 (37頁)、巷 LANE 嚙 (76頁)、雨 RAIN 連 (205頁)、律例 LAW 囉 (44頁)、生 RAW 囉 (37頁)

末音の/l/は「厘」で示されている。ただし、「ゝ」の表示はない。

語 teLL 爹厘 (21頁)、牽 puLL 舖厘 (37頁)、跌下 faLL 科厘 (43頁)、將軍 general 鄭拿厘 (233頁)、女仔 girL 家厘 (59頁)、田 fieLd 非厘 (210頁)、旧 oLd 奥厘 (37頁)、売了 soLd 騷厘 (161頁)、鉄把鶏 broiLed chicken 布来厘 威見 (89頁)

⁴² 本文では注音者が暗いlを母音として知覚したとする解釈に基づいて述べたが、現に母音として発音された/l/を注音したという解釈もあり得る。2つの可能性は連続的であり、おそらく明確に区別することはできない。ちなみに、Wells (1982a)は、暗いlが非成節的な後舌母音([ɣ]、[o])として実現する現象を'L Vocalization'(Lの母音化)と呼び、Lの母音化は新しく、少なくともロンドンではおそらく1世紀以内の現象だろうと述べている。Wells (1982b)によれば、Lの母音化は低い社会階層と結び付き、非難の対象とされる発音法だと言う。

まれに末音の /l/ を「列」で注音した例もある。その入声も使っているのであろうが、同様の文脈でもすぐ上の最後の4例に見る「厘」による注音のほうが一般的である。

紅絨被面 scarlet fieLD 士加列 非列（188頁）、殺死 kiLLED 基列（245頁）、斜紋被單布 cotton twiLLED 割頓 吐衣列（188頁）

また、やはりまれに、語末の /l/ を注音していない項目や「厘」以外の漢字を使って注音している項目もある。

少 littLE 列地 $\dot{\phi}$ （21頁）、檀香木 sandaL wood⁴³ 散打 $\dot{\phi}$ 活（105頁）、後門鎗 breech loading riflE 布列治 羅町 礼符 $\dot{\phi}$ （125頁）、細 smaLL 士孖鱗（21頁、185頁）⁴⁴

末音の /r/ は注音されていない。

四 fouR 科 $\dot{\phi}$ （5頁）、星 staR 士打 $\dot{\phi}$ （204頁）、添 moRE 麼 $\dot{\phi}$ （37頁）

4 初期英語学習書における流音の注音方式の展開

以上の観察と分析によって確かめられた中国の初期英語学習書における流音の注音方式を比較しやすいように表の形にまとめれば表3のようになる。例外性の高い表記などは省き、注音の概要を示す。

すべての英語学習書の注音法が単純かつ一方向的に進歩したわけではなく、また、学習書ごとにそれぞれの特徴がある。流音の注音の詳細は3節で個々の学習書について述べた通りであるが、特に重要な流れとしては、注音は /l/ と /r/ のあいだに区別のなかった状態から、両者を弁別し、特に頭音の /r/ を /l/ から区別して表記する状態に進んだとすることができる。

そして、当時の英語学習書における注音は唐廷枢の『英語集全』において傑出した水準に達し、以後の学習書の注音はそれに遠く及ばないものばかりであった。少なくとも筆者が確認することのできた学習書の限りにおいてはそのように結論付けることができる。

⁴³ 原文の landal wood を訂正した。

⁴⁴ smaLL は「士孖厘」と注音されていることもある（38頁、138頁）。

表3 中国初期英語学習書における流音の注音方式

		頭音の		末音の	
		/l/	/r/	/l/	/r/
『啖咕喇国訳語』	18世紀 中葉	後続の母音 (+子音)と の組合せを L音字で表 記	同左	「児」、ときに挿入母音との 組合せをL音字「里」「列」 で表記	不表示、とき に「児」「耳」
『紅毛番話』類	1830年代 以後		同左	挿入母音との組合せをL音 字(「尤(厘)」「利」「路」 「鏝」など)で表記	不表示
ロバート・トーム 『華英通用雑話』	1843年 (道光23)		同左、しばしば口偏 を付加	「力」(ときに「里」)の「合」	「児」の「切」
鄭仁山『華英通語』 (道光本)	1849年 (道光29)		同左	「尤(厘)」、ときに挿入母音 との組合せをL音字(「炉」 「羅」「鏝」など)で表記	不表示
子卿『華英通語』 (咸豊5年本)	1855年 (咸豊5)		同左、「児(倪)」を 前置	「児(倪)」	不表示
子芳『華英通語』 (咸豊10年本)	1860年 (咸豊10)		同左(咸豊5年本の 「児」前置は廃止)	「児(倪)」	不表示
馮祖憲 『英語註解』	1860年 (咸豊10)		同左、語頭では 「而」を前置	「而」	不表示、とき に「而」
唐廷枢『英語集全』	1862年 (同治1)		同左、右脇に「○」を 表示	「厘」、右脇に「、」を表示	不表示
鄭其照 『字典集成』第2版	1875年 (光緒1)		同左、ときに「児」を 前置	「児」	不表示
楊勳『英字指南』	1879年 (光緒5)		同左、「而」を前置	「而」	不表示、とき に「而」
黄少瓊 『字典彙選集成』	1895年 (光緒21)		同左、ときに「児」を 前置	「児」、ときに「路」	不表示
莫文暢 『唐字調音英語』	1904年 (光緒30)		同左、ときに「胡」を 前置	L音字(「路」「勞」など)で 表記、また、後舌母音とし て処理	不表示
卓岐山 『華英類語』第2版	1904年 (光緒30)		同左(『英語集全』の 「○」は廃止)	「厘」(『英語集全』の「、」は廃 止)	不表示

5 現代の英語学習書における流音の注音

英語の発音を漢字で示した英語学習書は今日もなお出版されている。古い時代の学習書における発音表記との対比の観点から、また、それ自体としても興味深い存在である。

5.1 学習書3点における注音の概要

次の英語指南書3点——下線を施した部分を書名の略称として用いる——において共通して現れる、流音を含む語がどのように表記されているかを確かめてみた結果の概要を表4に示す。

徐静编著『一看就能说 说英语』（延边大学出版社、2002年）

王慧编著『去美国，临时急需的999句应急英语』（华东理工大学出版社、2016年）

耿小辉・昂秀外语教学研究组主编『马上说英语 口语大全』（中译出版社、2016年）

いずれの指南書も注音の基礎は普通話である。同一の指南書において同一の語が数通りに注音されていることがあるが、作表の都合上表記の一部は省いた。

過去の英語学習書との対比を念頭に置いて現代の英語指南書における流音の注音の特徴を述べれば以下の通りである。

5.2 頭音の /l/、/r/

頭音の /l/ の注音の方法については、古い時代の英語学習書と大差はない。LOOK は「路克」、Like は「賴克」、LEt's は「来茨」、pLEAse は「普里斯」などと注音されている。古い学習書との実質的な違いは、普通話に基づいているために、入声や音節末の m を利用した注音がないことくらいである。

頭音の /r/ は、very から wrong にかけての例に見るように——例えば、veRY は「外瑞」、tomoRROW は「偷猫肉」、RAIN は「瑞恩」などと注音されている——、基本的に r の声母を持つ漢字——拼音で r を用いて綴られる字——を用いて表記されている。漢字1字で表せる発音はそうにし、1字で表せない発音は別の漢字を組み合わせることによって表記している。r の音を欠く広東語に基づく注音では英語の /r/ を表記するには他方言の発音を借りたり独自の記号を定めたりする必要があったが、普通話に基づく注音はその内部で完結させることができるということである。⁴⁵ ただし、/r/ で始まる英語の音節を中国語のいかなる音節ないし音節連続に変換するかについては筆者の予想に合致しない要素が多々ある。

例外的に、/t/、/d/ と /r/ の連続は、try 以下の例に見る通り——TRY は「揣」、DRINK は「准克」、chILDREN は「求准」などと注音されている——、一貫して zh または ch を声母とする漢字を用いて破擦音として表記されている。筆者の気付いた限りでは、『説英語』に

⁴⁵ 現代の英語指南書における頭音の /r/ の注音を踏まえて考えると、北京官話に基づいて注音したと言う『華英通用雑話』が /r/ の表示に r の声母を持つ漢字を使わず、L 音字に口偏を添えるという方法を用いたのはなぜかという疑問が生じる。

表4 現代の英語指南書における流音の注音

		語例	注音		
			『説英語』	『応急英語』	『口語大全』
頭音の	/l/	look	擻克	盧克	路克
		like	賴克	萊克	來克
		let's	來茨, 來茲	萊次	來次
		please	普力茲	普里斯	普立茲
	/r/	very	外瑞, 歪瑞	微瑞	歪瑞
		tomorrow	偷猫肉	特猫柔	特猫肉
		from	払繞母, 弗繞母	富繞木	夫若母
		rain	瑞恩	潤	瑞恩
		right	日烏愛特, 若埃特	如艾特	如愛特
		wrong	繞恩	如昂	如昂
		try	踰, 囟踰	揣	処愛
		drink	椎恩克, 枝瑞克	准克	准克
		children	喫衣欧准	求准	拆欧准, 秋桌恩
		末音の	/l/	all	奧, 奧欧
call	考, 靠, 卡奧			靠	靠
old	欧德			欧的	欧的
always	奧維茲			奧為茲	奧未字
tell	太欧			太欧	太欧
airmail	愛爾梅欧			艾兒沒哦	愛鵝妹欧
myself	麥賽欧夫			邁賽奧夫	邁賽欧夫
yourself	邀塞爾夫			么兒賽奧夫	要賽欧夫
/r/	your		邀	么兒	要
	for		夫奧, 弗奧	否	仏奧
	more		猫, 冒	茂	莫兒
	morning		猫寧	猫寧	帽寧
	first		弗爾斯特	福俄斯特	仏糸特
	year		耶爾	耶兒	也鵝
	there		在爾	在耳	在鵝
	later		來特爾	雷特兒	累特

において aDDREss が破擦音によらず「爾德日愛斯」と注音されているのが唯一の例外である。inTEREsted も『説英語』では「因吹斯替得」、『応急英語』では「印吹斯替的」と破擦音を用いて注音されている。

古い時代の英語学習書は一般に /t/、/d/ と /r/ を分けて注音していた。例えば DRINK の語の発音は、「唶吟及」（『華英通用雜話』24b）、「定冷忌」（『華英通語』道光本 69b）、「拿倪冷詎」（同咸豐5年本 121a）、「特冷詎」（同咸豐10年本 120a）などと表記されている。⁴⁶『華英通語』道光本が TRUst を「租時地」と注音していたのは例外的である（3.4.3）。

46 日本語の外来語「ドリンク」の音形と共通である。

5.3 末音の /l/、/r/

末音の /l/ は、ALL を「奥」、CALL を「靠」、OLD を「欧徳」、teLL を「太欧」としているように、一貫して ao や ou などの母音によって注音されている。気付いた限りでは、『説英語』が yourseLf の発音を「邀塞爾夫」として示しているのが、子音を用いたように見える唯一の例である。しかし、同書は不定冠詞の a を「爾」によって注音しており、⁴⁷ そのことを考え合わせれば「爾」はそこでも母音として扱われていると見るべきであろう。

これも古い英語学習書——末音の /l/ を「児」「力」「厘」「而」「路」などの学習書ごとに異なる字を用いて子音として注音していた——と異なるところである。ただし、『唐字調音英語』だけは、現代の英語指南書と同様に、しばしば末音の /l/ を後舌母音として扱って注音していた（3.9.4）。

末音の /r/ は注音されていないことも多いが——your を「邀」「要」、for を「夫奥」「否」、more を「猫」「茂」とするなど——、「児」「爾」「耳」の漢字を用いて注音されていることもある——youR を「么児」、moRE を「莫児」、yeaR を「耶爾」、there を「在耳」とするなど——。ただし、/r/ を注音していない場合と注音している場合を明確に区別できる音声的な条件は見出しがたい。

6 おわりに

中国の英語学習書における英語発音の表記の原理を確認し——原理は英語だけでなく、あらゆる言語の漢字による注音に共通するはずであるが——、18世紀以来の初期英語学習書における流音の注音法とその時間的な展開を分析、考察した。

論述に際しては、多くの局面において学習書の誤りや不統一を認定、訂正し、また、拙論（2018）と同じく、しばしば議論が学習書の評価に及んだ。歴史的な資料の慣習的な扱いとは異なるかも知れないが、古い学習書の注音をそのまま受け止めるという方法では著者の意図した方針が正確に見えてこず、英語の発音とその漢字表記の表面的な対応しか確かめられない。そして、学習書間の共通性と差異は明らかになっても、それが意味するところまでは分からない。著者の目指した注音、そして、それよりもさらに優れた注音を意識しながら学習書を見ることにより、各学習書の注音の特徴と優劣が明らかになるとともに、注音に関する学習書間の発展——ときには後退——の様相を確かめることが可能になる。

47 ちなみに、不定冠詞 a は『応急英語』では「俄」あるいはときに「額」、『口語大全』では「鵝」によって注音されている。

文献

- 内田慶市（1997）「清国英語事始」『関西大学中国文学会紀要』第18号
- 内田慶市・沈国威編（2009）『言語接触とピジン—19世紀の東アジア—』（白帝社）
- 田野村忠温（2018）「新出資料『華英通語』道光本と中国初期英語学習書の系譜—附論 福沢諭吉編訳『増訂華英通語』—」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第58卷
- 韩丽娜（2008）『《英吉利国译语》研究』（吉林大学硕士论文）
- 黄兴涛（2010）「《啖咕喇国译语》的编撰与“西洋馆”问题」『江海學刊』2010年第1期
- 林宏元主編（1976）『中國書法大字典』（中外出版社）
- 馬天祥・蕭嘉祉編著（1991）『古漢語通假字字典』（陝西人民出版社）
- 聶大昕・王洪君（2011）「《啖咕喇國譯語》、《播呼都噶禮雅話》簡介—從兩部尚未公佈的官方雙語辭書看清代早期廣東的語言和社會—」李向玉主編《澳門語言文化研究（2009）》（澳門理工學院）
- 矢放昭文（2009）「唐廷樞《英語集全》的兩種語音標寫」錢志安・郭必之・李寶倫・鄒嘉彥編『粵語跨學科研究：第十三屆國際粵方言研討會論文集』（香港城市大學語言資訊科學研究中心）
- 矢放昭文（2011）「英粵對音資料與鼻冠音」遠藤光曉・朴在淵・竹越美奈子編『清代民國漢語研究』（서울：學古房）
- 矢放昭文（2016）「英粵對音的聲調變讀與英語重音」『中国文化研究』第32号（天理大学中国文化研究会）
- 香港語言學學會粵語拼音字表編寫小組（2002）『粵音拼音字表（第二版）』（香港語言學學會）
- 杨玉良（1985）「一部尚未刊行的翻译词典—清官方敕纂的《华夷译语》—」『故宫博物院院刊』1985年第4期
- 周振鹤（1998）「《红毛番话》索解」『广东社会科学』1998年第4期（广东省报刊发行局）
- 周振鹤（2004）「大英图书馆所藏《红毛通用番话》诠释」荣新江・李聪主编『中外关系史：新史料与新问题』（北京：科学出版社）
- Bolton, Kingsley（2003）*Chinese Englishes: A Sociolinguistic History*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bridgman, Elijah Coleman（1847）‘The Chinese Speaker, or extracts from works written in the mandarin language, as spoken at Peking: compiled for the use of students, by Robert Thom, Esq. H. M. consul, Ningpo: Part I. Ningpo, Presbyterian Mission Press, 1846: With a biographical notice of Mr. Thom’. *The Chinese Repository*, Vol. 16, No. 5.
- Fuchs, Walter（1931）‘Remarks on a new “Hua-I-Yü”’. *Bulletin of the Catholic University of Peking*, No. 8.（『輔仁英文學誌』第8期）
- Wells, John C.（1982a）*Accents of English 1: An Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wells, John C.（1982b）*Accents of English 2: The British Isles*. Cambridge: Cambridge University

Press.

Wells, John C. (1982c) *Accents of English 3: Beyond the British Isles*. Cambridge: Cambridge University Press.

Williams, Samuel Wells (1837) ^(澳 門 葡 語 雜 字 全 套) 'Gaoumun fan yu tsā tsze tseuen taou, or A complete collection of the miscellaneous words used in the foreign language of Macao. 2. ^(紅 毛 買 売 通 用 鬼 話) Hungmaou mae mae tung yung kwei hwa, or those words of the devilish language of the red-bristled people commonly used in buying and selling'. *The Chinese Repository*, Vol. 6, No. 6.

Hanzi Transcription of English Pronunciation in Early Chinese English Primers:
An Analysis with Particular Reference to the Liquids

Tadaharu TANOMURA

In older times, *Hanzi* (漢字), Chinese characters, was the only means by which the Chinese could transcribe the sounds of foreign languages. In this article, the author will analyze the *Hanzi* transcription of English pronunciation as observed in thirteen Chinese English primers published in the eighteenth to the early twentieth centuries. The primers to be examined include, among others, *Yingjiliguo Yiyu* (『啖咭喇国訳語』), *Hongmao Fanhua Maoyi Xuzhi* (『紅毛番話貿易須知』), *Huaying Tongyong Zahua* (『華英通用雜話』), the first three editions of *Huaying Tongyu* (『華英通語』) and *Yingyu Jiquan* (『英語集全』).

The analysis will focus on the English liquids /l/ and /r/, which are not phonologically distinguished in Cantonese, upon which the phonetic transcription in most of the old Chinese English primers is based. A careful examination of the primers reveals how their authors perceived English sounds, and how they contrived to show the difference between the two liquids when they felt the need to do so. By comparing the phonetic transcription in the primers, which were published in different points of time, we may also catch a glimpse of when and how the pronunciation of English as was learned in China gradually approached the authentic level, although the change was not a unidirectional, straightforward one.

At the final part of the article, *Hanzi* transcription of English sounds found in popular English primers published in contemporary China will be briefly discussed, partly for the sake of comparison with older times, and partly as an interest of its own.

Keywords: *Hanzi* transcription, English pronunciation, the liquids, Chinese English primers